

## 「環境で地方を元気にする！地域循環共生圏」議事録

---

(開催要領)

1. 開催日時：令和3年1月25日(月)13:30~16:20
2. 場 所：岡山コンベンションセンター
3. 登壇者：  
中国四国地方環境事務所 所長 上田健二  
環境省大臣官房環境計画課企画調査室 室長 佐々木真二郎  
岡山県井原市 市長 大舌勲  
岡山県井原市 美星町観光協会 副会長 三宅輝明  
岡山県真庭市 副市長 吉永忠洋  
地方創生イノベータープラットフォーム INSPIRE 代表理事、BBT 大学経営学部グローバル経営学科 学科長・教授 谷中修吾  
環境省地域循環共生圏プラットフォームコーディネーター 高橋真寿美

(プログラム)

1. 開会挨拶 上田健二
2. 施策説明 佐々木真二郎
3. 講演①：取組発表等 『美しい星空環境を守り育てる「星の郷」まちづくりー美星町観光協会の挑戦ー』 大舌勲／三宅輝明
4. 講演②：取組発表等 「地域循環共生圏“真庭”の取り組み」 吉永忠洋
5. 有識者講演 「ローカル SDGs の超絶まちづくり～人と自然が共存共生する地域循環共生圏の創造～」 谷中修吾
6. パネルディスカッション テーマ：「地域資源を磨いて地域活性化につなげるためには？」  
パネリスト 吉永忠洋／三宅輝明／谷中修吾／佐々木真二郎  
ファシリテーター 高橋真寿美
7. 閉会挨拶 佐々木真二郎

\* 敬称略・順不同

---

司会：

皆さん、こんにちは。政府広報オンライン「未来に向けて 知る・変わる・守る チーム NEXT ステップ」のオンラインシンポジウムをご覧いただき、誠にありがとうございます。

「未来に向けて 知る・変わる・守る チーム NEXT ステップ」は、今、一步一步、次のステップへ進む準備をみんなで始めたい、今できることを知って、これまでの考え方や行動を見直し、これからの暮らしを守りたい、そのような思いから生まれた広報事業です。

私たちの目の前には、生活、雇用など、暮らしに密着した様々なテーマがあります。そして、それぞれのテーマに地域の特色を生かした取組があります。これらの取組について、国と地域の皆さんが一つのチームとなり、情報を交換し知識を深めるためシンポジウムやワークショップをオンライン開催し、全国へのライブ配信を実施しております。

本日はこちら、真庭市の郷原漆器、木目が美しいですね。そして井原市の井原デニム、手触りがいいです。このような物でも知られております、「晴れの国」岡山県の会場から、私、中村恵美が司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

さあ、ただいまからのお時間は、「環境で地方を元気にする！地域循環共生圏」と題して、シンポジウムを配信してまいります。アフターコロナ、ウィズコロナ時代における地域課題の解決のための地域循環共生圏について、その必要性やメリット、また期待されることを具体的な取組事例などを交えた講演、パネルディスカッションを通してご紹介してまいります。

なお、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から、一部の出演者の方々にはリモートでご登壇いただきます。どうぞご了承ください。また、本日の講演資料につきましては、ご覧いただいております YouTube 画面下の説明欄からダウンロードしていただけますので、あわせてご覧ください。

それでは初めに、地域循環共生圏についての映像をご覧ください。

司会：

地域循環共生圏についてご紹介させていただきました。

続きまして、シンポジウムの開会に先立ちまして、中国四国地方環境事務所所長、上田健二より、開会の挨拶をさせていただきます。上田所長、よろしくお願いいたします。

## 1. 開会挨拶

上田：

本シンポジウムをご視聴いただきまして、誠にありがとうございます。環境省中国四国地方環境事務所所長の上田です。開会に当たりまして、環境省を代表して一言申し上げます。

昨年来、全世界で新型コロナウイルスが猛威を振るっております。亡くなられた方々、被害に遭われた方々に、心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

この新型コロナの問題は、特に人口の密集する大都市がその中心になっています。このような感染症に弱い社会は持続可能とは言えず、社会の転換・変革が強く求められています。

環境問題も根っこは同じです。大都市では、例えば、光化学スモッグあるいはヒートアイランドなどが今も続いています。一方で、人口が減り高齢化が進む地方では、里山が荒廃し、土砂崩れ、イノシシ被害などが増加をしています。地方の社会も経済も疲弊しています。また温暖化に伴って、記録的な異常気象、災害、このようなものが各地で発生し、脱炭素への転換も急務になっています。

日本の地域は、持続可能性の危機にさらされています。2015年に国連で採択されたSDGs、

「持続可能な開発目標」は、こうした環境・経済・社会の全ての面での持続可能性を目指すものです。SDGs は、何も遠い外国の話ではありません。SDGs は、日本が今、地域で直面している問題です。地域に住む私たち自身の問題です。

環境省では、こうした地域が目指す未来社会のビジョンを地域循環共生圏と名付けています。漢字ばかりのやや硬い言葉なのですが、要は、ローカル SDGs を目指すということです。

ここでテレビのCMを事前にご覧になった方へ、問題の正解は「地域循環共生圏」、または、「ローカル SDGs」です。

さて、このような持続可能な地域の在り方は一つではありません。地域の個性、長所、このようなものはむしろ伸ばすべきです。その地域固有の資源を賢く使って、地域の中で経済を回し、地域が自立していく、そうした自立分散型の社会は、新型コロナなどの感染症にも強いものとなります。

ここ岡山県にも、多くの地域資源があります。例えば、いまや世界が注目する瀬戸内海の多様な自然資源や文化資源、それから中国山地の豊富な森林資源、晴天率が高い「晴れの国、岡山」ならではの星空資源などです。

本日は岡山県内の二つの自治体から、こうした地域資源を生かした取組をご紹介します。ですが、繰り返しますが、これが唯一の正解ではありません。地域ごとに最適なやり方があるはずです。今日のお話をヒントに、皆さんご自身の地域でも、未来社会について考える機会にしていいただければ幸いです。

最後に、今回のご登壇を快く引き受けてくださった井原市様、真庭市様、また有識者の谷中様に、改めて感謝を申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

上田所長よりご挨拶でございました。

続きまして、地域循環共生圏についての施策説明を行います。こちらの説明は、東京都の会場から、環境省大臣官房環境計画課企画調査室室長、佐々木真二郎より行わせていただきます。

佐々木室長の背景ですが、美星天文台としております。天文家の間でも有名な美星町は、全国に先駆けて光害防止条例を制定し、地域一丸となって星空を守っている町なのですが、佐々木室長は、美星町の星空をご覧になったことはございますか。

佐々木：

はい、まだないのです。以前、テレビで美星町の星空の映像が流れていたのを拝見して、本当に素晴らしい星空だなと思って感動したことがあります。いつかコロナが終わったら行きたいと思っております。よろしくお願いします。

司会：

そうですね。生でご覧いただくと、星空のシャワー、光のシャワーを浴びているようで、きっと感動していただけたと思います。コロナが落ち着いたら、ぜひお越しください。

本日は、その雄大な星空をバックにお話ししていただきます。

今回のオンラインシンポジウムでは、リモート会場からご登壇いただく皆様には、岡山県の景勝地を背景にお話を伺ってまいりますので、視聴者の皆様には、岡山県を感じながらお楽しみいただきたいと思います。

それでは、佐々木室長、お願いいたします。

## 2. 施策説明

佐々木：

はい。環境省環境計画課の佐々木でございます。私の方からは、「環境で地方を元気にする！地域循環共生圏」について、ご説明させていただければと思います。

まず、もう皆さんは、肌でも実感されているのではないかと思います。毎年のように大きな災害が起きるようになってきております。気象災害が発生して、大きな被害が出て「温暖化の影響ではないか」、様々なことが言われるわけです。

環境省としては、この状況を受けて、昨年6月に、「気候危機宣言」を出しました。それからもう一つ、今年度に入って、新型コロナウイルスの影響が甚大なものとなっております。先ほど所長の上田の挨拶の中にもありましたが、都市に一極集中することへのリスク、それから日本国内でモノを生産していない場合の調達ができなくなるグローバルな経済の脆弱性など、様々なことを皆さんは実感で、危機として感じられたのではないかと考えております。

どうも日本は、世界は、持続可能ではないということになり、では、持続可能な社会に向けて変革をしていかなければいけないという動きが、世界でもう起こっており、日本でも起こっています。

2015年に、SDGsが中に書かれている、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、また同じ年には、「パリ協定」で、実質温室効果ガスの排出ゼロを目指していくことを合意しました。

新しい、これからの文明社会を目指していくためには、このような化石燃料に頼っていた社会を大きく変えていくパラダイムシフト、大きな考え方の転換が今、必要になっております。

もちろん我々の持続可能性を支える問題は、CO2の問題だけではございません。こちらにあるものは、プラネタリー・バウンダリー、地球の環境容量というものですが、幾つもの項目で、地球の限界をもう超えているのではないかと、例えば生物の多様性の保全の問題や養分の窒素の問題など、様々な分野で、もう危険な状態に陥っているのではないかと、このままでは1個しかない地球では、我々人類は持続可能な形で社会を営んでいくことができないのではないかと、そのような議論がずっとされているところでございます。

2050年に向けて、この間2020年の10月の国会で菅総理も、「カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指すこと」と宣言しました。菅総理からは、「カーボンニュートラルの挑戦

は、日本の新たな成長戦略である」とされています。「地球温暖化対策を進めることで、日本の成長戦略にしていこう」というメッセージが投げ掛けられました。

環境と経済というのは、これまでの長い間、環境を優先すれば経済が立ち行かない、経済を優先させれば環境が悪くなるという相反するものだという意識が強かったのではないかと思います。ただ、こちらのグラフで見ていただくと分かる通り、最近では温室効果ガスが6年連続で減っているのに、実質 GDP は増えているのです。このように環境と経済が両立できるような時代に、もうなっているということです。そのようなこともあって、成長戦略ということになってくるわけです。

そこで環境省では、この地域循環共生圏というものを打ち出しております。こちらは地域の活力を最大限に発揮していく、そして日本の津々浦々の地域、地域が、地域の資源を生かして自立分散型の社会をつくっていこうというコンセプトになっております。

先ほど、脱炭素というお話をしましたが、では化石燃料、地下の資源を使っていたものから、これからはそれではない形に移行していこうとなると、資源はどこにあるのかということになります。

資源は、再生可能エネルギーにしても、食にしても、それからいわゆる生態系サービスといわれているものですね、そのようなものは全て、広く薄く国土に分散しております。これを最大限に生かしていかないと、カーボンニュートラルも、持続可能な社会も実現できないのではないのでしょうか。

そうすると、日本の各地域が、全て皆さん、持続可能な形で資源を取り出していくことができるようになっていかないといけない、地域の活性化が持続可能な形で達成されなければいけないことになってまいります。

そして、それらの地域には、その地域なりの気候や風土、歴史、文化がございます。ですから、これらの地域は、実に多様で、個性のあるものになっていきます。そうすると、それぞれの得意分野を生かして支え合うという構造になっていくのではないかと考えております。

こちらの図でも、農山漁村と都市を例に書いておりますが。農山漁村では、食料や水、そのようなエネルギーを生産できます。都市には、沢山の人材や資金があります。これらをお互いに支え合うことで、自立分散型の社会を強固なものにしていこうという考え方です。

そのときに、持続可能に達成することを考えると、大事なことが脱炭素の観点、それからリサイクルなどを含めた循環経済の観点、それから自立分散型の分散した社会で、自然資源をきちんと保全しながら使っていくという三つの社会への移行が大事になってきます。その三つの移行を通して、経済社会を、リデザイン＝再設計していこうというのが、地域循環共生圏です。

そして具体の地域で、環境にも地域のためにもなるような事業を起こし、その事業を実践していくことが、SDGs を実践してローカル SDGs になっていくのだと、我々は考えております。

地域循環共生圏の特徴を、木質バイオマスのエネルギーを例に、ご紹介したいと思います。従来の視点ですと、木材を、安定供給の観点から、どうしても海外から買った方が安定的に供給できるということがあって、輸入をするという例もあります。

しかしながら、こちらをやってしまうと CO2 が沢山出てしまったり、それから外部資本で発電事業を行うことで、地域外にお金が出ていってしまったり、熱エネルギーを活用しない場合は、多くのエネルギーを活用できない状態になってしまったりして、電力を自給できたとしても、どうも地域は元気にならないということがありました。

地域循環共生圏の視点では、そこにある地域の資源を最大限に活用しますので、まず木材は、では地元の森から採りましょう。そうすると今まで手が入っていなかった森に手が入ることで、土砂災害の軽減や生物多様性の保全にも貢献できるのではないのでしょうか。

それから地域主導の新電力会社、地域に根差した会社で運営することで、利益の一部を地元に戻元することができたり、若しくは地域で雇用を生むことに活用できたり、熱を活用することで、新たな観光振興につなげたり、非常時にはそこで熱と電気を自給することで、災害時のレジリエンスの強化、災害のときでも熱エネルギーを使える体制を確保したりということで、木質バイオマスという一つの事業を入れることで、様々な地域課題を同時に解決していくことを目指すことが、地域循環共生圏の大事な視点になってきます。

これをやっていくときに大事になってくるのが、地域で経済的な部分をしっかりと雇用という形で出していくことだったり、地域の人々が連携して協働する、そのような中で、環境と経済と社会を向上させていくことが必要になってきます。

こちらは、地域経済循環分析というもので、環境省で公開している、地域の経済の構造を解析するツールの岡山県の結果です。こちらで見ていただくと、岡山県で様々な生産がされて、分配がされて、支出するという、ぐるぐると県内でお金が回っているのですが、特に注目していただきたいところは、画面の下にあるエネルギー代金のところです。

何と岡山県では年間 5,000 億円以上ものお金がエネルギー代金として地域に流出しているのです。これは思っていただければ納得できると思うのですが、エネルギー代金の多くは、化石燃料です。日本全体では、20 兆円弱のお金が毎年海外に出ていっているのですが、そのような大きな赤字の構造にあるということが、日本のほとんどの自治体の実情です。

このように、地域の経済にも目を向けて、再生可能エネルギーを沢山生産して、それを地域でしっかり使っていくという地産地消を行うことで、強い地域経済を作っていく視点も、地域循環共生圏の特徴となってきます。アプローチを求めますと、先ほど言った、統合的、行動的対応、同時解決や協働パートナーシップ、経済などが大事な視点になってまいります。

ウィズコロナ、アフターコロナ時代の地域循環共生圏ということで、脱炭素、循環経済、分散型社会への移行を共生圏というものの中で具体化していく、それが地域で SDGs を実践することにもなっていくと思います。それを多くの人々の協働で進めていくのが、地域循環共生圏のコンセプトになっております。

私からは以上となります。ありがとうございました。

司会：

日本の現状と課題についてのお話がありました。次の世代に地球の豊かな環境を引き継いで

いくためには、今、行動する、そして変革していくことが大切なのだと実感いたしました。佐々木室長、ありがとうございました。

続きまして、取組発表に移らせていただきます。一つ目の発表は、井原市様によります「美しい星空環境を守り育てる『星の郷』まちづくり」についてです。それでは岡山県井原市長大舌勲様、どうぞ、よろしくお願いいたします。

### 3. 講演①：取組発表等

大舌：

皆さん、こんにちは。今日は地域循環共生圏というテーマで、このような発表の場を頂きまして、心より感謝申し上げたいと思います。

発表の前に、若干、井原市を説明させていただきます。井原市は岡山県の西南部に位置しておりまして、西は広島県福山市と接しておりまして、ほぼ福山市の経済圏に入っております。瀬戸内海から車で20分ほど入ったところが中心地となっております。人口は約4万弱です。

冒頭に少し司会の方から説明もありましたが、従来より繊維織物が盛んで、江戸時代から綿花栽培が盛んでありまして、藍染織物が盛んに行われておりました。戦後、ジーンズが入ってきまして、それがジーンズに替わりまして、国内初のデニムを織った地域でもあります。

今日、私がこのように着ておりますのも、実はデニムジャケットで、下はジーパンをはいて仕事をしております。職員は、みんなジーパンで仕事をして普及しておりますけれども、このような地域です。

井原市も、やはり例に漏れず、少子高齢化が急速に進みまして、そしてまた去年、今年と新型コロナウイルス感染症で、本当に地域も疲弊している中で、今後、将来につなぐ、まちづくりのかじ取りという大変難しいかじ取りを、今、迫られています。どこの地域もそうだと思いますが、その状況にあります。

この中で、アフターコロナを見据えて、どのようなまちづくりをするのかということ、一番大切なことは、やはりこの地域にしかない資源や財産をどれだけ使えるかということだろうと思っております。この地域にしかない産業や文化、自然、そのようなものをしっかりと使っていこうという思いで、井原市も取組んでおります。その一つが、このようなデニム産業をしっかりと振興していこうということです。

そして自然につきましては、今日テーマで紹介させていただく、「星」であります。井原市の北部には美星町がありまして、名前の通り「美しい星の町」でして、SDGs が叫ばれる前から、「きれいな美しい星を守ろう」という条例を制定しまして、もう30年にわたって、そのような取組をやってきた地域です。

このたび、次のステップとしまして、国際認定制度であります「星空保護区」の認定に向けた取組を現在行っております。これについては、後ほど美星の観光協会の三宅副会長から説明をさせていただきます。

そして、我々がいます岡山県は、先ほど紹介もありましたが、晴天率が高くて大気の揺れが

少ないということで「晴れの国、岡山」といわれています。

美星だけではこのような活動もできないので、岡山県や近隣市町村を巻き込みまして、家族で天文を楽しめる活動も行っております。岡山県は「天文王国、おかやま」ということで PR をいたしておりますが、その中で、「星めぐりスタンプラリー」といったことも井原市が事務局となって行っております。岡山県、近隣市町村を巻き込んだイベントとして、美星町を中心にこのようなことにも取り組んでいる地域であります。

このようにして、このたびのテーマにもあります、「過去から現在、未来に向けて、地域の豊かな財産、資源をしっかりとつなぐこと。生かすこと。そして共に生きること」、これがこれからの新しいまちづくりに必要ではないかということで、そのような取組をしっかりとやっていきたいと思っているところであります。

紹介に先立ちまして、市長としましてのご挨拶とさせていただきます。ぜひ今日は、美星町の取組を聞いていただきたいと思えます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

司会：

それでは詳細につきましては、美星町観光協会副会長の三宅輝明様より説明していただきます。三宅様、よろしくお願いいたします。

三宅：

よろしくお願いいたします。それでは、今ご紹介いただきました、美星町観光協会の三宅の方から、「美しい星空環境を守り育てる『星の郷』まちづくり」というテーマでお話しさせていただきますと思います。

今日は、今、市長から「デニムの町」ということをご紹介いただいたのですが、まだおなかが成長中ですので、スーツは作らずにデニムのネクタイを締めて頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

それではまず美星町についてです。美星町という名前の町が誕生したのは、昭和 29 年 6 月 1 日です。当時、小田郡美山村、塚村、宇戸村と、川上郡日里村の四つがありまして、それが一つに合併して誕生しました。当時の人口は 1 万 788 人ということで、今から考えると、大変多くの人口がいました。その後、平成 17 年 3 月 1 日に、今の井原市、芳井町と美星町が合併しまして、一つの町、井原市となりました。

昭和 29 年 6 月 1 日に美星町が誕生したわけですが、美星町の名前の由来は、当時、美山村にありました美山川と、塚村にありました星田川の名前を採ったといわれております。色々諸説あるのですが、それが一つの由来となっております。

私は、今、ここに美星町がある中で、ここで一つ目の奇跡が起きたのではないかと考えています。このときにこの名前が誕生していなければ、今、私もこのような席には座っていないでしょうし、今のようなまちづくりは、このときがない限り始まっていなかったと思います。本当にこれが奇跡の第一目だと、今でも感じております。



星田という名前は、星田川がある星田の地名から来ていて、その星田には流れ星伝説があり、その中の一つに星尾神社があります。昔、流れ星が落ちてきた跡に祠を建てお祀りしたという伝説が残っています。星の由来のある神社が、今、美星町内に三つあります。三つの星の伝説ということで、今も受け継がれています。

美星町と星との関わりを、これから説明させていただきます。80年代後半になりますと、美星は星の街という、星の郷から星を守るということで、色々と変わっていきました。

ごめんなさい。一個戻らせていただいてよろしいでしょうか。

まず、「星の郷」の名前の関わりを説明しなければなりません。「星の郷」という名前が出てきたのは昭和57年頃なのですが、美星町でオリジナルの道の標識を作ろうという話が持ちあがりました。もう本当に美星町だけのオリジナルの道案内の標識を作るということで、黄色い薄い星のマークが入った上に、色々な地名が入った、「星の郷みちしるべ」事業を行ったときから、「星の郷」という言葉が誕生してきました。

その後、「星の郷」という言葉を町民の皆さんも使うようになりまして、要所要所の色々な施設や、色々なイベントにも、全て「星の郷」という言葉が多く使われるようになってきました。中でも、今でも残っていますのは、「星の郷青空市」や「星の郷ふれあいセンター」、「星の郷文化発表会」というイベントなど、色々と「星の郷」という言葉が先行して、美星町の星の街としてのスタートを切ったと覚えています。

そのような中、グッドタイミングで、昭和59年に海上保安庁所管の水路観測所が倉敷市の方から美星町に移る話が出てきて、美星町の中でも最も標高の高い512メートルある大倉竜王山というところに水路観測所が移転してまいりました。

現在は、この水路観測所はもうなくなっているのですが、跡を利用して、今は井原市の星空公園として利用されています。いつも町の方からも皆さんが来られます。とても見晴らしのいいところで、南は四国山脈が見え、北は大山が見られるような土地でして、観光客も多く来られるスポットの一つとなっています。

そして、先ほど言い掛けましたが、「星の郷」という言葉を使い出した80年代後半になりますと、美星町は愛称だけが先行して、「星の郷」「星の郷」と言っていたのですが、昭和62年8月17日から21日までの5日間、美星水路観測所の広場で、「スターウォッチング星の街コンテスト」が開催されました。これは環境庁が全国に呼び掛けて、継続の星空観測を行ったもので、双眼鏡を使いまして、夏の星座、こと座の一部に見える星の数を競うものであります。

コンテストの結果、翌年1月に、美星町を含めて全国で108か所の自治体が、「星空の街、あおぞらの街」に選定されました。美星町もその一つに選ばれて、名前だけの星の郷から、本当の星の街としてスタートしたのがこのときだと思います。

そして星の街としてスタートしたからには、色々な星のイベントなどをつくっていかうということで、昭和63年8月に3日間、「星降る夜」というイベントを始めました。これは当時、色々な星の専門的なことから、音楽や色々な演劇などを楽しむことも交えて、星に詳しい人から詳しくない人まで、みんなが楽しめる星のイベントを始めようということで始められまし

た。

一つは野外の演奏会を「吹星（すいせい）」ということで始め、講演やスターウォッチングは「考星（こうせい）」、もう一つ、星の歌詞が入った歌などだけで行われるカラオケの大会や、演劇、邦楽演奏会などをメインとする「遊星（ゆうせい）」と名付けて催しを繰り広げました。この88年の最初の「星の降る夜」は、約3,000人の参加があったと覚えています。

ここで二つ目の奇跡が起こるわけです。私なりの奇跡です。この「星の降る夜」のイベントを開催して、星を見る日が大雨となりました。大雨となってはもちろん星は見えませんが、集まっていた天文グループの方たちと夜をどのようにつなぐかということで、座談会、意見交換会が持たれました。その席で、天文グループの方々から「美星町の星空を守ってほしい」という提案が出ました。ここで二つ目の奇跡が起きたわけです。岡山県は「晴れの国」といわれるように、四季を通じて晴れた日が多く、美星町の高原のようななだらかな形で、気候が安定していて、望遠鏡で星を見てもシャープに見えます。ふらつきがない、揺らぎがないということです。また、市街地や工業地帯から離れていて人工の光が少なく、夜空が暗いことから、国内でも有数の天体観測地であり「美星町の星空を守る条例を、ぜひ作ってほしい」という、本当に皆さんから具体的なご意見を頂きました。そのときは町民としては全然考えてもいなかったことで、本当に奇跡が起きて、そのようなものを作ってほしいということ、外の人、天文愛好家の方々から教えられたような感じでした。

もちろん当時、日本では、光害の考え方が一般的ではない中でしたので、町では条例の内容や条文を協議するのに、発案から約1年間かかりました。そして検討を重ねて、平成元年11月22日に「美しい星空を守る美星町光害防止条例」「光害防止条例」として制定しました。

制定してからの美星町と星との関わりですが、色々なことをやっていきました。平成3年7月6日、7日には、「心やすらぐ光、夜の環境を考える」ということで、美星町の方で「光環境フォーラム」を開催しました。環境庁をはじめ、全国から環境問題に関心を持つ約300の方が参加され、照明の専門家や教育関係者、マスコミの関係者など色々な方にお集まりいただいてフォーラムを開催しました。

その中で、当時の国立天文台長の基調講演で、「心やすらぐ夜の景観を考える」と題したシンポジウムや意見発表、イベントの後には、「星空に親しみ、やすらぐ夜の景観を創造するためのアピール」を全員一致で採択して閉会となりました。

それからの美星町と星との関わりです。町が建設を進めてきた星のシンボル施設、「美星天文台」が平成5年7月7日夜7時から一般公開となりました。これは本当に町民の中でも念願でした、「星の街にふさわしい天文台を造りたい」という思いから、やっとの思いで完成できました。

これは標高425メートルの山頂に銀色のドームが光り輝いていまして、隣には中世の町を再現しています中世夢が原という公園があるのですが、その公園を抜けると、一気に未来の宇宙を感じさせてくれるような光景が広がっています。

ドームの中には、公開天文台としては中国地方最大級の101センチの反射望遠鏡を備えて

いまして、誰でも気軽に、ぜいたくなことにスタッフの解説付きで、天文観測ができる施設となっています。本当に週末などは家族連れ等で賑わっています。

そして、「星の郷」ということでスタートしたわけですが、平成12年9月2日、3日にかけて、第12回、「星空の街、あおぞらの街、全国大会」が、高円宮殿下、同妃殿下をお迎えして、美星小学校の体育館を主会場に開催されました。

当時は本当に手作りの大会でして、食事からおもてなし等々、全員美星町の色々な人が出て、行ったことを今でも覚えています。このときの手作りで、その頃から皆さんが星の街に関わるきっかけがどんどん広がってきたように思います。

星空とあおぞらは大気環境の一つの指標で、郷土のかけがえのない財産です。この財産を次の世代、世紀へ引き継ぐと共に、美しい星空がもたらす恵みを地域おこしにいかそうという目的で開かれました。

先ほど「美星天文台ができ上がった」と言いましたが、その後にもまた嬉しいといえますか、待ち望んでいました、平成14年5月16日に、スペースデブリと呼ばれる、役目を終えた人工衛星やロケットの一部などの宇宙のごみ、地球に接近する可能性のある小惑星について観測を行う、美星スペースガードセンターが、JAXAの管轄で完成しました。今、ご覧いただいています写真、向こうに小さく見えるドームの方が美星天文台で、手前が美星スペースガードセンターのドームです。

その後の関わりです。色々と星の街として進んできたわけですが、平成23年の民法番組で「天文学者27人が選ぶ星空がきれいな場所」に井原市美星町が、沖縄県の石垣島、石垣市、それから長野県の南牧村と共に選ばれたことにより、三つの自治体の連携による「日本三選星名所」という動きが始まりました。今でも三つの町で交流を続けさせていただいております。

そして若い人たちも色々な星に対するイベント等を考え出しました。平成27年10月には「星ガールイベント」を行ったのですが、その中で、星の準ソムリエで、タレント、現在はデザイナーとして活躍中の、篠原ともえさんを美星星空大使に任命させていただきました。これは今でも続けていただいております。

そして先ほど、市長からご紹介がありましたが、今、岡山県は「天文王国、おかやま」ということで、美星も拠点の一つとして、天文関連施設が充実する岡山県の中で、美星町も色々と頑張りをまして、各自治体と協力しながら魅力を発信しています。その一つのキーポイントの場所として美星町も一翼を担っているところであります。

そして、星の街や星の郷から始まりまして、星の施設と色々行って来たわけですが、星に詳しい方もそうですが、もっと美星町を身近に感じてほしいということで、皆さんに簡単に来ていただいて美星を知っていただけるような星をテーマとしたイベントも作っていかうということで、色々なイベントなども考えて行ってきています。

その中でも今、沢山のお客様にお越しいただいているものが、夏に行います「天の川祭り」と呼ぶものがあります。灯籠を皆さんに買っていただきまして、それに願い事を書いて地上に天の川を作るイベントを始めました。それから、先ほど紹介しました星尾神社では、毎年七夕

祈願祭が行われます。

流れ星伝説の地で、三つの流れ星が美星町に落ちて、それを信仰するために星尾神社、高星神社、明神社が建てられたのですが、その一つ先ほど紹介しました星尾神社の方で、全国から集められました願い事の短冊をお焚き上げるイベントを8月に行っております。これは全国の手デパート等の関係からも、沢山の願い事の短冊が寄せられまして、皆さんの願いを天に届けるイベントを行っております。

このようなことから、流れ星等が沢山見えるということで、この祭りをつくりかけた頃から、星の郷からもう一つのキャッチフレーズとして「願いかなう町、美星」というイベントなども始めたように思っています。

そのように星に関するイベントを行ってきたわけですが、去年は皆さんご承知の通りコロナということで、美星町のイベントも全て中止となりました。本当に寂しい思いをしたわけですが、黙ってはいけないということで、全国に「星の街」「願いかなう町、美星」をPRしていこうと、去年は「おうちで楽しむ七夕キット」ということで美星町から発信させていただき、全国の皆さんに七夕のキットをお送りして、自宅で七夕を楽しんでいただいてその願い事の短冊を先ほどの星尾神社の方へお返しいただいて、皆さんの願い事を天に届けるという取組を行いました。

これは少し期間を長く設けまして、7月下旬から8月にかけて、自宅でゆっくり夜空を見上げていただき、国立天文台が提唱しています「伝統的七夕」を旧暦に七夕に楽しんでいただくということで企画させていただきました。これも皆さんに知っていただいて、イベントではないのですが、北は北海道から南は九州まで、様々な皆さんから願い事が集まって来ました。

そのように色々「星の郷 美星町」「願いかなう町 美星」ということで進めてきたのですが、これからは美星町観光協会のチャレンジ、特に新たなチャレンジについて説明させていただきたいと思えます。

美星町観光協会は昭和39年に設立したのですが、先ほど言いましたように「星の郷 美星」「願いかなう町 美星」をキャッチフレーズに美星町を全国に発信しています。地元根付いたイベントの開催をはじめ、観光スポットの清掃美化活動やペンションや観光案内所の運営管理、各種イベントの出店など、色々な分野で美星町のPRを行っております。そして最後に美星町の美しい星空を守る活動にも今取組んでいるところです。

その中の「美星の星を守る」チャレンジで、「びせい星守プロジェクト」を立ち上げました。都市化が進んだ日本では、人工の光が過剰にあふれる光害により、人口の70%が天の川を見ることができない場所に住んでいるといわれています。美星町も例外ではなく、近年では屋外の照明の増加、またLED化によって町全体が明るくなったといわれています。人工光の増加は星が見えにくいだけでなく、自然環境への影響もあり、せっかく先人が築き上げてきた美星町の美しい星空が失われてしまうのではといった危惧を感じていました。

そして、この町の美しい星空環境をこの先もずっと残していくために、平成30年3月に、当時は、STAR VIEWER PROJECT、今は「びせい星守プロジェクト」と名前を変えていますが、

これを立ち上げました。

主な活動は、町内の自動販売機や電飾看板の 22 時以降の消灯の推進活動。そして町内の街灯を環境に優しい色へ変更する推進活動を行っています。

美星町内での星空保護に関する啓発活動としては、平成 29 年に環境保護のイベントを美星町内にて開催しました。国際ダークスカイ協会東京支部の越智先生を講師にお招きし、「光害から自然と共生を考えよう」というテーマで講演を開催し、平成 30 年には、IDA 東京支部の研究会を地元美星町で開催し、いかにして星空環境を守るかというテーマの下に発表、意見交換をしていただきました。

そして、「世界基準の美しい星空環境の実現に向けて」ですが、平成 31 年 3 月に美星町観光協会と井原市が協議しまして、美しい星空を次世代に引き継ぐべく、より実効性のある取組として国際ダークスカイ協会が 2001 年に始めた、光害のない暗く美しい星空を保護、保全するための優れた取組を提唱する、「ダークスカイプレイス・プログラム」（和名：星空保護区認定制度）の認定を目指すことを両方で確認し合い、それを進めることとしました。

星空保護区の中には六つのカテゴリーがありますが、美星町は、その中で町や市といった単位が認定対象の「ダークスカイ・コミュニティ」という部門の認定を、今目指しております。なお町や市の単位で認定を受けている場所は、日本国内はもちろん、アジア圏内にもまだ一つもないことから、これが認定されれば美星が初めてということで、アジアトップクラスの星空ということになります。その環境保全に積極的に今取組んでいるところです。

認定されることによる効果で、今考えられるものとして、一つは星空観光（アストロツーリズム）の促進、二つ目としては環境保護に関する取組や姿勢の表明および地域への啓発効果、また三つ目、地域環境保護の基盤形成や自然破壊・望まない開発に対する防衛根拠となると考えられています。

ダークスカイプレイス・プログラムは、専門機関による世界基準の客観的な評価であるといえ、ある地域が認定された場合は、そのニュースは IDA から世界に向けて発信されます。世界中の関係者が目にすることとなります。

もっと広い視野で言えば、人々が美しい星空を楽しめる環境を守ること・次世代の子供たちに、美しい星空が見える環境を残すことが、最大のメリットといえます。

ちなみに今、日本では、違う部門ではありますが、沖縄県と東京の神津島の二つが、スカイパークという部門で認定を受けています。

色々と厳しい条件があります。そのこの図に今、出ています条件を満たさなければいけないということで、色々と厳しい取り決めがあります。

認定に向けて、美星町では町内に設置された防犯灯が、平成 20 年頃から急速に蛍光灯から白色の LED に変更が進められてきて、上に漏れる光が生じており、また発する光のまぶしさから、以前より美星町の夜空が明るくなったのではという危惧も出始めていました。

これら町内の交換が必要な防犯灯は約 400 灯あり、地元の理解を頂きながら着実に交換していくことが必要であることが分かってきました。まず、国内の照明メーカーの中に IDA の

基準を満たす防犯灯が見当たらないことも問題として分かってきました。また美星町の市の公共施設は数多くあり、交換が必要な照明器具は別に 400 灯あることも分かってきて、相当な作業量が発生することも分かってきました。

そのような中で、井原市の職員に平成 31 年 3 月にパナソニックを訪問していただき、美星町の取組について意見交換し、ご協力いただけることとなりました。その中で、パナソニックさんの方からモデル照明の提供がありまして、それを町内に試験的に取り付けました。

そして、その状況を I D A 東京支部の代表の越智先生方に来ていただいて現地確認をしていただいたところ、そこで上方に光の漏れがあることが分かりました。それでは使えないということで、改めて美星町観光協会と市の方でパナソニックさんにご縁がありまして訪問しまして、I D A の基準に適合する照明器具の開発を要請しましたところ、快く承諾していただき、これを受けてパナソニックさんの方で、防犯上必要な明るさを保って、住民の安心・安全を確保できて I D A の基準を満たす照明器具の開発に着手していただきました。その下にあります写真の照明器具が、パナソニックさんによって開発されました。

このことによって、美星町での機運の盛り上げは、そのような照明器具ができた後もう一度、光害の対策についてのセミナーを開催したり、令和元年 8 月には光害防止条例制定 30 周年を迎えて住民に向けて星空保護区の認定に向けた記事を出した広報誌を発行したり、色々と住民の皆さんに向けて「この事業が必ず必要なんだ」と広く周知するようにしました。

機運の盛り上げのもう一つとしまして、400 灯以上の照明器具を購入するに当たり、クラウドファンディングも行わせていただきました。当初は 200 万円を目標に始めたのですが、町内外、特に町外の方からもご支援いただき、目標の 296% ということで、約 600 万円の資金が集まりました。

集まった資金等を利用して、令和 2 年 7 月、美星町観光協会において、防犯灯交換に向けて、新防犯灯の認証器具を購入して 9 月に納品が行われ、昨年 12 月に四百数基の新型の、I D A に認められた防犯灯の取り付けが終了したところです。

終了してから、7 月にパナソニックさんと市との共同でプレス発表を行ったわけですが、相当な皆さんからの反響を今現在も頂いているところです。パナソニックさんの方でも、全国的なコマーシャルや色々なメディアへの発信もしていただき、また今回の取組について、メディアの皆さんの取材等も非常に多くなりまして、こちらとしても驚いている次第です。

星空保護区に向けた持続可能なまちづくりということで、防犯灯と国際保護区を機に、これから色々な持続可能なまちづくりを進めていこうと思っています。その中で、一番取組まなければいけないと感じているのは、観光客が実際に訪れる受け皿が脆弱であること、地域の消費拡大につながる仕組みの構築をこれからまだまだやっていかなければいけないこと、それから星空ガイドの育成なども、これからどんどんやっていかなければいけないと感じています。

その中で、今回美星町では、「星の郷まちづくりコンソーシアム」を立ち上げて、地元のだけでなく色々な他分野からの意見も伺って、まちづくりを進めていくことを始めました。色々

なことを、コンソーシアムの方でも、今、始めているところです。最終的には、星の郷まちづくり会社のようなものを核として、これから、色々なまちづくりを進めていければと思っています。

ということで、少し時間がおしてしまいましたが、そのようなチャレンジを今、展開しているところでもあります。以上です。

司会：

今コロナ禍の中で、美しい星空を見て心が癒される方もきっと多いと思います。私たちも環境を守るためにできることがあるのではないかと感じました。本日は大舌市長には井原デニムのジャケットとジーンズで、そして三宅副会長にはネクタイを締めてということで、事例発表をしていただきました。ありがとうございました。

続きまして、二つ目の発表は、真庭市様によります「地域循環共生圏、真庭の取組について」です。それでは、岡山県真庭市副市長吉永忠洋様、どうぞよろしく願いいたします。

#### 4. 講演②：取組発表等

吉永：

皆さん、こんにちは。岡山県真庭市から参りました、吉永と申します。それでは真庭市の「地域循環共生圏の取り組みについて」皆様に私たちの報告をしたいと思います。

絵は、ちょうど SDGs の円卓会議ということで、1年前ぐらいですが、このときには500人ぐらいの人が集まって、SDGs について語り合っている図であります。真庭では SDGs 一色の状況です。

岡山県真庭市は平成17年に9町村合併で誕生いたしました、新しい市です。対等合併ということで、「多彩な真庭」と私たちは呼んでいます、地域の色々な特徴を生かして新しいまちづくりをやっていこうと誓い合い、一つになりました。

ちなみに私は、この中の町の一つの久世町というところの役場の職員をしておりました。昭和53年、22歳で役場に入って以来、ずっとこの仕事を43年間やっています。今日はべたべたのプロパーといいますか、その視点で、皆様に真庭で私が体験してきたこと、感じたことをお話しできたらと思っています。

まず私たちが考えていることです。合併当時は融和を行ってきましたが、12年経ちまして、今は「里山資本主義、真庭の挑戦」というタイトルと「真庭ライフスタイル」という二つのテーマを持っております。このことをこの8年間追及してきました。今日はそのような話を中心になろうかと思っています。

真庭市は2018年に、全国29のうちの一つとして、SDGs 未来都市に認定されました。ちょうどこれは内閣府で私どもが認定を受けて、市長がどうしても都合が悪いので私が出席しております。その中で、実はモデル都市10の一つに選定されました。

当日行くまではよく分からず、行ったら「10に入ってるよ」と言われまして、「なぜ入った

のかな」「いいプレゼンしたのかな。計画がよかったのかな」とも思ったのですが、実はそのようなことではなくて、よそを見ていても過去の実績といいますか、SDGs に近い名前ではなくても、そのようなことをやってきた自治体が選ばれました。人口5万、10万の規模では、本州では真庭市だけという状況でありました。

では、真庭市がなぜここに選ばれたのかですが「里山資本主義」という言葉が真庭の今代名詞となっています。藻谷浩介さんの著書で、当時、新書大賞を取った『里山主義』という本ですが、NHKの番組としてスタートいたしました。

里山資本主義とは、里山の資源に注目し、それを活用して域内循環を起こす経済システムまたはその生き方、今で言う本当にローカルSDGs そのものです。

そして、その象徴的な事業がバイオマス発電です。先ほど佐々木室長のお話にも出てまいりましたが、まさに真庭はその町の一つであります。真庭のバイオマス発電所は、簡単に言うと、重油を燃やしてスチームを炊いて電気を起こすのではなくて、木を燃やして電気を起こすという仕組みです。年間24.5億円の売り上げで、今順調に事業として成立しているところです。

では、なぜこれが成立するのかが、次の仕組みになります。林業の話になってきますが、この図にありますように、山には木があります。それをお金に換えるためには、フォレスターの皆さんにお願いして伐採をして市場に持って行きます。市場に木を持っていくと、製材所がその木を買いにくるわけです。製材所がそこで木を買って、柱や板に加工します。そして製品市場に持ち込みます。

実は山と市場と製材所と製品市場の仕組みの全部が、真庭ではワンセットでそろっています。それも一つの大きな地域資源であるのですが、それを全国から業者が買いに来て、お金になります。そして代金が戻ってきて、山に戻っていきます。ただ昭和30年代には10米当たり5万円ぐらいで非常に高値で取引された山の木が、今は1万5,000円を切るということで、ほとんど林業にならず、だから山から木が出ない状況があります。

そのような中で、ここにバイオマス発電という仕組みを我々は醸すことになりました。発電する前にバイオマス集積基地に木を集めるのです。木を砕いて発電所に持って行って、燃料にします。

山には木を切った後に枝が残ります。枝をバイオマス集積基地に持っていきます。原木市場でも売れ残った原木があります。これを持っていきます。製材所も、丸い物を四角にする訳ですから、製材くずが出ます。これを持っていきます。各家の庭木なども持っていきます。これを持って行ってチップ化することによって、地域の余り物を余すことなく残す、それが実はバイオマス発電の仕組みであります。

お金の流れで行くと、年間42.5億円が収入で真庭に入ってきます。民生用の量でいくと、真庭の住民の1.7倍の電気を売っている状況です。その内14億円が、バイオマス集積基地に戻ってきます。それを分けるわけです。7億円が地域や山に戻ったり製材所に戻ったり、原木市場に戻っていきます。みんながWin-Winの仕組み、みんなが喜ぶ仕組みが実はこのバイオマス発電の仕組みになります。



問題がなかったわけではありません。これだけの木が出るのかという悩みが、我々にはありました。当時、私は林業の課長をやっておりまして、計算するとどうしても木が出ないのです。

中心になっている銘建工業、今のバイオマス発電所の中島社長に「木、出ませんよ」「どうしても経済的に難しい」という話をしたところ、中島さんは、「吉永さん、そういうことじゃなくて、1万キロワットの発電をしないと世の中変わらないんだ」とおっしゃいました。一つの心中というような形で、市も含めて、私たち真庭はこれに取り組むことになりました。

中島さんの言葉は、実は、昨日今日思い付いた言葉ではなくて、1993年に「21世紀の真庭塾」という民間団体ができたときからの思いであります。「このままだと、真庭はだめになる。だけど地域の資源を生かして、それを産業化することによって、新しい真庭を切り開こう」という先人たちの思い、ちょうど今70歳くらいにその人たちはなっていますが、そのような人たちの思いがここに実現したということでもあります。単に経済の仕組みというより、人の思いというものは本当に大きいなと今でも感じるどころであります。

「21世紀の真庭塾」は、1997年に一つの報告書を出しています。「子供たちに人気なのが冬季の温水プールである。これは地元の製材所の自家発電による電気と蒸気が使われている。これは材木の製造過程で生まれてくる廃棄木材を再利用したもので、一般家庭の7割がこの電気で賄っている。木材から電気がうまれるという事実も、真庭では子供たちが自然と人とのつながりの中で学ぶ大切な教材である。自家発電所の見学会が定期的に行われている」。

今でも、ネット上でこの文章を見ることはできますが、当時思われたことが、ほとんど実現しております。「それではみなさん、2010年の素晴らしい真庭で、またお目にかかりましょう」という言葉で、この文章は閉じられています。

さて、経済の観点から里山資本主義を見てまいりました。これだけではもったいないということで、暮らしの中で、里山資本主義が成立しないだろうかということをお考えしました。

経済中心の里山資本主義を大きな里山資本主義と例えるならば、小さな里山資本主義もあっていいのではないかと、集落の中の色々な資源を生かした新しい地域づくりに、我々はチャレンジすることになります。

これから、中和(ちゅうか)という蒜山高原の一角の小さな村のお話をさせていただきます。9か町村合併と言いましたが、人口650人の一番小さい地域で、学校は小学校だけではありません。支所もなくなりました。高齢化率も40%を超えて移住者もいますが、横のつながりが無い、未来に希望が持てない地域です。

私は当時、交流定住をやっている担当の部署を行っておりましたので、中和の方に入りました。知っている人が多かったこともあって、色々なお話をさせていただきました。「もう、合併していいことは一つもなかった」と、「役場が遠くなるし、もう私はここで死ぬばかりじゃ」と、口々に言われました。3時間ぐらい話をして、もう夜も更けたので、「帰らなくてはいけないかな」と思ったときに、ある方が、「まあ、色々言うたけど、ちょっと言いすぎたかもしれん。もう一回、何か頑張ってみるわ」と言ってくださいました。

私たちは中和を振興する仕組みづくりに取り掛かります。まず、市庁と呼ばれていた旧町村

を、振興局と名前を変え、地域を振興する場所にいたしました。地域振興機関専門の職員を配置いたしました。後発ではありましたが、地域おこし協力隊を配置し、また、外からの移住者を入れるための交流定住センターを造りました。1年間でこのような事業をやり、さらにもう一つ必要なものは、外からの知恵だと思いました。このような要素がそろって、実は地域が危機感を持っている場合には成功するのではないか、地域振興につながるのではないかと思います。

コミュニティのようにお金を配るのではなくて、経済を回すことによって地域を振興する、地域振興会社という仕組みを考えました。次の年に、総務省の地域再生マネージャー事業を活用して、共存の森ネットワークの吉野さんという方をマネージャーに迎えました。地域振興集団とセットです。

中和では、地域のあるもの探しの事業が始まります。色々なところに二人が行って「これがいい」「あれがある」というものを探し出します。夜になると、二百何十戸の内の70戸をこの二人がずっと回りながら、「自分たちはこういうことをしたいんだ」と伝えてまいります。

意識が共有される中で、赤木さんという青年と出会います。お婿さんとして来ておりました赤木さんは「中和のために一生を捧げたい」と言ってくれました。赤字の温泉施設がありましたが、そこを薪ボイラー化することを、私たちは提案いたしました。

赤木君はアシタカという地域振興会社を立ち上げます。おじいさんたちが、もう信頼関係ができていて「赤木のためなら」と、薪を運ぶ仕組みを作りました。また蒜山高原に、先ほど言った移住者もレストランを造ったりして、外から人が少しずつ集まるようになってきました。少しずつ横につながっていくようになります。

津黒高原荘は、従前はボイラーで重油代が350万かかっていたのが、200万で済むようになりました。200万がアシタカの収入ですが、100万は自分の取り分、100万はおじいさんたちの取り分です。100万では暮らせないということになります。小さな生業を積み重ねていく暮らし、それを、「半農半X（エックス）」と我々は呼んでいます。

27年になります。地域振興会社の取組はさらに進んでいきます。クロモジを使ったり、地域のダイコンを使ったりする新しい仕掛け、R i n ・ e n という会社ができるようになります。移住者も少しずつ増えてまいりました。

このような中で、地域づくり委員会という地域を支援する組織がここで誕生します。地域振興会社が立ち上がったことで、実は最初に目論んだことは、この段階でできてきていました。

その次にということで、考え出したことが「なりわい塾」という新しい仕組みであります。今できている経済の仕組みをずっと永続的に続けていくためには何が必要か、なりわい塾という中和に入る新しい人たちのための塾を我々は検討いたしました。

なりわい塾、地域はどこもそうだと思うのですが、次世代につながってほしいと思っています。若者に移住してきてほしいと思っています。移住者は、自分らしく生きたいけれども、地域になじめるか、地域に仕事はあるのかを悩みます。移住者が地域に入る作法と地域が移住者を受け入れる作法を共に学んでいきます。農産地には100のなりわいがあります。お金ばかり

に頼るのではなく、自らつくる暮らしどこで誰と何をするか、「これからライフスタイルを一緒にデザインしてみませんか」。

大勢の人に参加していただき、第1期がスタートいたします。塾長は洪澤寿一さんという方で、洪澤栄一さんのひ孫になる方です。この方と、右側は地域の人たちです。PTAの会長もいれば地域づくり委員会の会長もいます。この人たちも講師として塾に立ちます。

最初に全員で集まって話し合いをします。地元学、地域を歩くことによって、集落の成り立ちや地域に入る心得を学びます。産業と暮らし、どのようにして暮らしていくか。地域で自給できるものなどを探していきます。そして、聞き書きという独特の方法があります。集落のおじいさん、おばあさんにお話を聞いてみよう、耳を傾けます。右下の図では、おばあさんが二人の女の子に、2度目には、折鶴を折って待っていました。「あげる」と、二人の女の子にあげました。「ありがとう」と言います。するとおばあさんは、「友達じゃけ」と言います。そのときにはちょっと涙が出そうになりました。おばあさんはご主人に先立たれて、息子さんも都会に出て一人暮らしです。「自分の人生をこれほど聞いてくれて、共感してくれる人がいるなんて思ったこともなかった」。そのようにして、地域の人たちと塾生たちの間は縮まっています。

里山資本主義ともう一つの言葉、真庭ライフスタイルとは実はそのようなものであります。都会ほどの暮らしはないけれども、家族との充実した暮らし、地域の務め、この三つがそろって、実は幸せはここにあるのではないかということが、真庭らしい生き方、真庭ライフスタイルです。

30年に、なりわい塾も2期生を迎えて、50人の若者たちが、中和の中を歩きます。2年目は、色々と自主事業を始めます。空き家調査を始めました。空き家調査をして、実は空き家はオープンにしないのです。自分たちでクローズドして、色々な人の関係人口の中で、「中和に行きたい」という人にだけ、紹介する仕組みです。現段階ではもう空き家はなくなっております。

その中で、実は平岡商店の平岡おばあさんとの出会いがあります。おばあさんはバス停のところで商店をやっていました。「人に貸すことは嫌だけれども、塾生には貸す」と言ってくれました。

中和いきいきサポーターズクラブ、中和を残そうという小学校の塾生たちとの付き合いの中で何十人にもなっていました。しかし場所がないのです。「自分たちで場所をつくろう。補助金は要らない」。みんなで地域でこのように自分たちの手で家を改修していきます。そして完成しました。

これは子供版なりわい塾です。子供たちが集まって、放課後に地域の暮らしや祈り、歴史、宿題などをする場所です。これはたまたま私がふらっと夜に寄ったら、大変なことになっていました。

人がたまって、移住者もいるし、元々の地元の人もあります、関係人口の人もあります。色々な人がここでお話をしています。まさに関係人口そのもので、ごちゃ混ぜです。そのような時代

の場所がそこに出現していました。

社会的にも、30人などの社会増になったこともあり、全国過疎地域活性化の優良事業としての顕彰も受けることになりました。

これは子供たちが何をやっているかという、竹の中にかんなくずを集めて津黒高原荘に売るので。そうすることによって自分たちの活動費を集めています。子供たちも、なりわいの中の一つに入っています。

さらにそこに人が大勢集まってきました。はにわの森や森の幼稚園などの、国際化を目指すようなスペースができてきます。ミシュラン一つ星の鰻屋が、今年の1月にオープンしました。東京からそば屋も来ました。『捨てないパン屋』という本を書かれた有名なパン屋もやってきました。とうふ屋もやってきました。

しかし、有名な人がやってきたことが実は大事なことではないのです。ミシュラン一つ星が来たことが大事なことでもありません。この人たちが「真庭で暮らそう」「中和で暮らそう」という価値観を持って、それを我々と共有できたことが本当に嬉しいという状況です。

今年はもう既に11名の移住者が、東京や大阪から来ております。来年は、この人たちに子供が3人生まれるということで、今、中和の未来が少しずつ見えてきているところです。まさに先ほど言いましたが、ごちゃ混ぜの持続可能な未来はこのようなものだと、我々は今思っています。

地域循環共生圏。よく考えてみると、今やってきたことというのは、まさに地域循環共生圏そのものです。真庭のSDGsは、一番地域循環共生圏と親和性が高いのだろうと私たちは、今思っています。

続いて、これからのお話をさせていただきます。SDGsの認定を受けて、最初にやったことが、将来予測です。京都大学の広井先生にお願いいたしまして、AIを活用した分析を行いました。

非常に細かいシミュレーションですが、大ざっぱに言うと、2020年代前半、今我々は、「ひと」への投資が必要であろうという結論に達しました。そして10年後には、もう一度、「まち」への投資が必要であろうということです。今の真庭ライフスタイルを深めていき、もう1回、里山資本主義を深めるときが来るだろうと思っています。簡単に整理をしますと、このような流れになりますが、時間もありますので省略いたします。

今、私たちが行っていることは、若者が未来をつくるということで、未来への投資、また歴史を紐解き未来を見据えること、そして主として一番大事なことは、地域共生社会です。真庭ライフスタイルそのもの、他者を認める社会と地域循環共生圏です。

地域循環共生圏、まさにローカルSDGs、森、里、川、海について、もう一つの取組を、今、行っています。水源の里全国サミット平成27年を、真庭市が行いました「上流が下流を思い、下流は上流に感謝する」ということであります。翌年全国アマモサミットが備前市で行われました。『里海資本論』という本は、NHKの井上さんという方が書かれて、実は『里山資本主義』と兄弟本なのです。そのような関係もあって、私も呼ばれてそこへ行きました。

「共に生きる」。最初に30年に、備前の田中さんという中心的な方ですが、真庭の農林業の大会に来ていただき、「森里川海をつなぐ里海づくり」ということでご講演いただきました。その後ろにありましたものが、実は「里海米」という動きです。カキ殻を土壌改良剤として使う仕組みですが、その中でさらに真庭は「真庭」という名前を付けてもいいというお話を頂いております。「真庭里海米」です。

里海米にもう一つ、生ごみの液肥化事業という循環型の事業を行っており、それを足すことによって、そのブランド名が付きます。もう既に里海米の中では真庭里海米が一番多くの量を産出していますが、最高のブランドに持っていきたいと思っております。「里山は里海を想い、里海は里山を思う」、一つの地域循環共生圏の形がここにあるのだらうと思えます。

そしてもう一つは、川ごみ、山ごみの問題です。私たちの出したごみが、海ごみとなります。それを解消するために、私たちにやれることはないだろうかということで、これはイノシシですが、私どもから出たごみで作っています。これが全国色々なところに今行って、海ごみのテーマとなっております。

真庭市として、この海ごみ問題を瀬戸内海の方々だけではなく、我々も一緒に取組みたいと、今、提案しております。そのパートナーとしては、先ほどの中和とは真逆の、一番南の北房という地域を私たちは選びました。

50年前からホタルの保護活動を進めてきた地域です。光のように見えますが、これはホタルが乱舞しているのです。これは50年の保護活動の成果が、まさにこのような全国的なホタルの産地を生んでおります。

その中で子どもたちはずっと環境について学習してきました。「里海ホタルっこミュージカル」とは、劇は一つの大きな教育になることもあり、ホタルの町北房が、ずっと子供たちの心に染みこんでいるところであります。

その中で、次の動きとしては、「渚の交番」というプロジェクトを今考えております。今備前で「渚の交番」の事業を実施されておられます。真庭でもこれをやりたいということで、今手を挙げたいと思っております。決定しているわけではありません。できたら「全国初の、山にある渚の交番になりたい」と思っています。

そこでは、真庭の里山のもの、里海のことを体験できるプログラム、それから、勉強、ワークショップ、色々な研修、物販を行います。備前がここにあり、真庭がここにある、また逆に備前にも真庭があります。私たちは、「渚の交番」というの名の下に、備前に真庭の森や真庭の渚があつていいと思っており、備前の森が真庭にあつてもいいと思っております。

地域循環共生圏です。今、地域、真庭の中で物が回ることを考えてきましたが、森、里、川、海、里山、里海、もう一つ大きな循環共生圏ということで、新しい時代を、パートナーと一緒に切り抜けていきたい、そのような思いです。

以上です。ありがとうございました。

司会：

星空を守る人たち。そして今度は、森を守る人々のお話ということで、全国から注目されているバイオマス事業について、そしてそこで生活している方々に寄り添うような様々な支援をされていることがよく分かりました。人に投資する、人を育てるお話が大変印象的でした。吉永副市長、ありがとうございました。

続きまして、有識者講演といたしまして、東京都の会場から、地方創生イノベータープラットフォームINSPIRE代表理事、BBT大学経営学部グローバル経営学科学科長・教授、谷中修吾様からご講演を頂戴します。

谷中様の背景ですが、蒜山高原とさせていただきます。雄大な自然と多彩な観光スポットで、西日本屈指の高原リゾートですが、中でも、1周29キロメートルのサイクリングロードは、大自然を体全体で感じることができるスポットとなっております。

谷中様は、蒜山高原にお越しいただいたことはありますか？

谷中：

はい、何度もあります。ちょうど昨年12月に行きまして、この写真とは違って雪でしたが、冬には冬のよさがあるし、夏は夏で、秋は秋でと、本当に素晴らしいですね。

司会：

四季折々の魅力があります。また蒜山焼きそばや蒜山大根など、お勧めの食も沢山ありますので、コロナが落ち着いたら、ぜひまた何度でもお越しいただきたいと思います。

それでは谷中様、ご講演をどうぞよろしく願いいたします。

## 5. 有識者講演

谷中：

はい、ありがとうございます。よろしくお願いします。

皆様、こんにちは。ここまで様々なご登壇者の皆様がお話しされた内容も踏まえさせていただきます。私からは、「ローカルSDGsの超絶まちづくり～人と自然が共存共生する地域循環共生圏の創造～」と題しまして、お話しさせていただきたいと思います。

本日の内容は4点。まずは、「ローカルSDGs」。冒頭に佐々木様からお話がありましたが、その内容を踏まえて、私からもお話しさせていただきます。続いて、今回は、地域づくりが重要なテーマでもありますから、ローカルSDGsを踏まえた上での「超絶まちづくり」、それらを統合して「地域循環共生圏の実現」、その取組を発信して「世界をリードする日本へ」という構成でお届けします。

まずローカルSDGsについて、私の自己紹介も交えながら、お話をしたいと思います。今ご紹介いただきましたが、私は、地方創生イノベータープラットフォーム「INSPIRE」という団体を経営しています。また、ビジネススクールで教員も務めております。

出身は静岡県湖西市で、浜名湖の西側です。私が小さいときには実家の周りに自然豊かな

田んぼや畑があったのですが、工場が発展するに従って町が様変わりしてしまったということが強い原体験となりました。人と自然の持ち味を生かしたまちをつくりたいという思いで、今に至っています。

これまでクリエイター、NPO・NGO のマーケター、外資の戦略コンサルティングという時代を経て、現職に至っております。今の仕事は、ビジネスプロデューサーと言います。

今回は地域ビジネスという話ですが、私は、ビジネスをつくる側の仕事を専門にしています。一番やりたいことは、地方創生まちづくりです。ビジネスの視点を持ちながら、地域をつくり上げていくことに取り組んでいます。

例えば、東日本大震災の後に、10年間かけて、スターバックス、キヤノン、松下政経塾の協力を得て、カフェづくりを通じてコミュニティ再生を行う「道のカフェ」を実践してきたり、ヤマハ発動機さんと一緒にランドカーを活用してモビリティで地域活性化を実現する「まちノリ☆ラボ」を立ち上げて活動してきました。

さらには、価値創造型の農産漁村アイデアソン「農村インポッシブル」ですね。こちらは、農水省さんとやっております。また、東京オリパラの後の東京湾沿岸のまちづくりを設計する東京ベイエリアビジョン。そして、本日一緒させていただいております環境省様のプロジェクト。もう8年になりますが、日本全国のローカル SDGs を表彰する「グッドライフアワード」の総合プロデューサーを務めております。

実は、このアワードが始まったときには、SDGs という言葉がまだ世の中に全く浸透していませんでした。「エコでソーシャルな」という言い方をして、日本中で長年活動されてきた皆様を表彰する活動をしてきました。

これからご覧いただくのは、環境省と一緒に作らせていただいたグッドライフアワードの映像です。まずは皆さんに、日本全国にどのようなローカル SDGs の取組があるのか、ぜひ、動画でご覧いただきたいと思います。再生をお願いします。

谷中：

ご覧いただきました。ローカル SDGs を長年実践されている方が非常に沢山いる国が、日本なのです。冒頭に実践事例のお話でしたが、地域循環共生圏づくりを実践されている方が日本中にいます。岡山県内にも多種多様なプレーヤーの皆様がいらっしゃることは、今日の冒頭の話の中でもお分かりいただけたのではないかと思います。

岡山県を中心に、この中国地方の中で、過去にグッドライフアワードの環境大臣賞を受賞された皆さんを幾つかピックアップしてみました。まずは、英田上山棚田再生プロジェクトです。こちらは、英田上山棚田団の皆様が、長年かけて、地域の棚田を再生しました。そこから人と人とがつながり、海外の方からも非常に注目されていますね。

こちらは、官民出資の自治体新電力で再生可能エネルギーを地産地消する取組で、ローカルエナジーさんと鳥取県米子市さんによる共同事業。まさに官民ですね。新しい地域ビジネスのモデルを展開されています。

そしてこちらは、智頭町の「森のようちえん」。智頭町森のようちえん、まるたんぼうさんの取組です。コロナ禍で注目されている様々な取組の中で、先端的な事例と言っても過言ではないと思います。

このように多種多様なローカル SDGs の宝庫であるということが、私が本当に感じていることです。特に今、国際会議で情報発信に取り組んでいるのですが、OECDという経済機構があります。こちらで農村イノベーションの委員会があり、私はアドバイザーボードで民間側のエキスパート委員を務めています。日本には、ローカル SDGs のプラットフォームとして、環境省のグッドライフアワードというものがあるんですよ」と言うと、皆さん驚かれます。つまり、「日本全国のローカル SDGs は、世界基準である」ということ。皆さん、自信を持って発信していけると思っています。

さて、そのような取組がある中で、これを地域活性化につなげるということで「超絶まちづくり」の話題に進んでみたいと思います。私は、人と自然の持ち味を生かす町をつくりたいと、ある意味で、小さいときから、ローカル SDGs に取り組んできました。地域循環共生圏づくりを無意識のうちに実践してきたのだらうと思っています。

色々な地域づくりの現場を重ねる中で、あることに気が付きました。それは、まちづくりという領域には、ビジネスの視点で見ると、必勝パターンがあります。

私は、「イノベーター」という呼び方をしますが、ゼロからイチで新しい価値を生み出し、ビジネスをつくる人たちがいます。彼らが実践している地方創生まちづくりを「超絶まちづくり」と定義しました。これは商標も取りました。

この集合知を一部の人に共有するのではなくて、現場で頑張っている方に広くシェアしたいと強く思い、「INSPIRE」という団体を立ち上げました。非営利団体です。日本中のイノベーターを束ねて、今は国内最大級の地方創生イノベータープラットフォームの一つとなっております。

まちづくりの現場で活躍しているイノベーターたちに、このような登壇の場を作り、みんなのやっている知見を発信してもらいます。それを私が体系化して、現場にお届けします。

そこで、今回、一番お伝えしたかったことは、この図になります。地方創生まちづくりで活躍するイノベーターが実践しているビジネス開発手法は、ゼロからイチを生み出すのですが、通常のビジネス開発手法とは違うのです。

左側に「問題解決型（コンサルタント型）」と書いてあります。これが、一般的なビジネス開発手法です。課題を把握して、その解決の方向性を導いて、事業テーマを決めます。そして、マーケティングとビジネスモデルの設計が続きます。

しかし、現場で活動しているイノベーターたちを見ていると、明らかに、この問題解決型のアプローチではないのです。何をやっているかという、右側の「価値創造型（イノベーター型）」です。端的には、赤い枠で囲んでいるところがポイントで、突き抜けたアイデアからスタートしています。すなわち、「自分がワクワクするからやる」「どうしてもやりたいんだ」「思い付いちゃった」というようなアイデアからスタートするわけです。



しかし、単にそれだけだと、独りよがりになって終わりますね。ポイントは、その後に「社会的課題の紐付け」をやっているのです。すなわち、完璧な後付です。

そうしますと、先ほどのアイデアは先に思い付いてしまって出ていたのですが、社会的な課題を紐付けているので、そのアイデアに基づいて活動をすればするほど、地域の課題を解決する、若しくは、潜在ニーズを満たすような活動に変換されていきます。そうしますと、あとはマーケティングとビジネスモデルの設計、この流れは一緒になります。要は、最初の2ステップが違うということです。

このように、突き抜けたアイデアで地域循環共生圏を生み出しているイノベーターは、実は沢山あります。このスライドの一個一個は説明しませんが、例えば、高知県須崎市でご活躍の竹虎さん。山岸義浩さんが社長を務め、竹の車、竹トラックを作って、「竹は面白いぞ」と日本中をキャラバンされました。竹に注目する方が集まり、地域の竹の産業が潤っていくというような好循環を作りました。

佐賀県の伊万里市で、PEAK SMILEさんという団体がおありまして、「筋肉かき氷」という取り組みをされています。「一体何なんだ？」と思いますね。ふだんは消防士や自衛隊にお勤めされている方や、スポーツジムのトレーナーさんなどがいらっしゃいます。皆さんが地域のために何ができるかを考え、「俺たちには筋肉があるぞ」ということで始めたのが、「筋肉かき氷」です。

「地域循環共生圏と一体何のつながりが？」と一瞬思うのですが、ちょっとこちらの映像をご覧くださいと思います。どうぞ。

谷中：

一体何だったのでしょうかと思うかもしれませんが。これを政府広報オンラインに流すという私の夢だったのですが、無事に完了できました。きちんと意味があります。

今ご覧いただいたように「筋肉かき氷」で何が起こるのかといいますと、みんなが「筋肉かき氷が食べたい」「あの人たち、一体何なの？」と人がやって来るわけですね。かき氷を頼むと、お姫様抱っこしてくれて、このように写真を撮れるのです。女性に大人気です。

みんなが「筋肉かき氷」の出没状況に合わせて、現場に来るわけです。そうして撮った写真をInstagramにアップします。そうすると、また人が来ます。これを地域の商店街でもそうですし、また農村の色々な場所でやるわけです。

そこに人が集まると、「せっかく来たんだから、地域の食事を食べていこうか」「ちょっと遊んでいこうか」となります。すなわち、これが地域循環共生圏づくりの最初の突破口。地域のエネルギーを作り出すことに大きく寄与しているということです。

今、お見せしましたのは価値創造型の一例なのですが、突き抜けたアイデア、一見無駄と思われるものに全力を注ぐ、そこからきちんと社会的課題を紐付けることによって、事業テーマを設定したときに、非常に強いビジネスのエンジンが生まれます。

この社会的課題に地域課題や環境課題を紐付けることで、地域と環境の問題の両方を同時に

解決するということが可能となります。地域循環共生圏づくりの本質を実現できる、大変重要なポイントだと私は認識しています。

「突き抜けろ！」ということですね。要は、環境活動というものは真面目に取り組みがちですが、「突き抜けたアイデア、やっちゃっていいんだよ」ということが、私が一番伝えたいことです。しかも、発信していくということも重要です。私はデジタルマーケティングという領域の専門でもあるのですが、このスライドは、慶応大学のSFC研究所で「地域デザイン・ラボ」を2020年の夏に私が恩師と一緒に立ち上げたものです。地方創生の領域で、デジタルマーケティングを駆使することで、皆さんの取組を一気に世界に発信することができます。地域マーケティングという領域になりますが、何の目的で、どのような情報をどのように発信して、どのようなアクションを起こしてもらいたいのか。きちんと戦略的に設計するデジタルリテラシーも非常に重要で、皆さんの取組を一気に日本国内に、また世界に伝えるという発信も可能であるということです。

これを踏まえて「地域循環共生圏を本当に現場で実現していくには？」ということになります。そこで、地域循環共生圏に「突き抜ける」という視点を加える、すなわち、価値創造型のエッセンスを組み込むという話をしてみたいと思います。

キーワードは、縄文です。これは、我々が培ってきた文化と関連しています。ここでは、「自然と共存共生した縄文の思想哲学に基づくビジネスデザイン」という考え方をご紹介しますと思います。

ビジネスの観点から言う“縄文型”は、直観的、協調的、フリーダム、感謝オリエンテッドという4つの特徴があります。そして、先ほど私が話したイノベーターたちの特徴と一致しているわけです。その背景を少し説明したいと思います。

私は令和元年に、『最強の縄文型ビジネス』という本を出版しました。現代ビジネスというのは、KPI、PDCA、ROIなど、管理型経営が基本です。皆さん、もう大好きですね。すぐに目標を設定して、達成度はどうかとチェックする。目標が達成されると、今度は、「じゃあ、次年度はその2倍だ」「いやいや、3倍だ」など、「もっともっと」と、際限なく成果を求めるようになります。「もっと利益を上げてこう」となるのです。

いつから管理型経営が始まったのだろうと考えますと、この原型は、弥生時代に生まれたことが分かりました。すなわち、今、写真にある通り、稲作の時代ですね。米作りに村の資源を集中投下するので、いわゆる効率が良いです。そこで、「今年はこれぐらいやろう」という目標設定が生まれます。そして、目標達成のためには村人が勝手に動いては困るので、コンプライアンスが生まれます。また、米作りに良い場所を確保するために、隣の村と競争が始まる。そして「今年は、このぐらい投資したのだから、このぐらい収穫できるはずだ」という期待が生まれるわけです。

これが、計画的、競争的、コンプラ重視の期待オリエンテッドという弥生型ビジネス。まさに、現代ビジネスには、弥生の村と同じ原理が引き継がれています。企業が利益の最大化を求めることに最適化したビジネスなのです。

弥生型ビジネスは、際限なく利益を求め続けます。「今年、米がこのくらいできたんだから、来年は2倍だ」「3倍だ」となるわけです。ですから、地球はこのようになってしまいました。したがって、SDGsは、それにブレーキを掛けるために生まれたとも言えます。ただ、そもそもSDGsの1番から17番まで、皆さん暗記で言えますかという、言える人は非常に少ないと思います。分解的な思考なので、取り組んでいるうちに全体を見失うリスクがあり、注意が必要です。

このSDGsというものは、いわゆる「もっと、もっと」という弥生型ビジネスにブレーキを掛けるための弥生型処方箋なのだと、私は捉えています。全部、目標値があるのです。この目標をきちんとやっていくことによって、初めてブレーキを掛けられます。ですから、私はこれを大変重要だと思っています。

しかし、思想哲学がなければ、行動様式は変わりません。「目標だけ守ればいいんですか」ということだと、永遠に行動様式の本質は変わりません。SDGsには、17個以外にも18番19番は必ずあるはずですが、それを毎回設定していかないといけないとなってしまうと、きりがありません。ですから、根本の行動様式が変わるように、思想哲学が埋め込まれるべきです。

そこで、「自然と共存共生した1万年の実績に注目せよ」です。これが、縄文時代です。弥生時代のはるか前、1万5,000年にわたって続いたといわれる縄文時代。その特徴は、先ほど紹介した通り、直観的、協調的、フリーダム、感謝オリエンテッド。自然と共存共生しているので、米作りのように一つの食料調達に特化するのではなくて、魚もあれば肉もあるし木の実も食べる。色々な物を合わせ技で生活するわけです。

食料調達というものは、ビジネスで売上を伸ばすことと同じですから、例えば、「今年は魚がだめでも、肉があるね」「肉がだめでも、木の実があるね」ということで、非常にレジリエンスが高い。だから、自然の声に耳を傾けて、直観的に動けるわけです。そして色々な村と協調し、縄文土器に表れるように、自由な発想で土器を作る。また、自然に感謝するから、資源を使い果たすことなく共存共生していきます。縄文型と弥生型は、根本的に思想が違うわけです。

どちらがいいか悪いかということではありません。弥生型の良さもあるし、縄文型の良さもあります。しかし現代は、この弥生型に傾倒しすぎてしまった。だから、地球がこのような状態になっているということは、疑いようのない事実だと思います。

つまり、縄文型というエンジンを我々の中で思い出すことによって、縄文と弥生のツインドライブ、すなわち、二つのエンジンのバランスを取る。それこそが、地域循環共生圏を進めていく上で非常に重要になると考えています。

そして最後、これらの発想に基づいて、世界をリードする日本になり得るのだということで締めたいと思います。今、コロナ禍で、世界の地方創生はどうなっているか。色々な国で、「今後、どうやって地域づくりをしようか」「都市開発をしようか」、みんな迷っているわけです。そして、答えはないのです。

ただ、自然との共存共生を模索する動きになっているということは確実に言えます。ですか

ら、国際会議の中でも「SDGs」という言葉は必ず出てきますし、色々な国にどのような事例があるのかを、皆さん探しているわけです。

私自身は、単身で世界一周をして、世界のまちづくりを研究してきました。ちょうど後ろに映っている写真は、地球を西回りで一周、色々なところを見てきた様子です。

当然ですが、世界の都市や街には、色々な宗教があつて、色々な考え方があつて、色々な文化があります。すなわち、街のオペレーティングシステムだけではなく、ハードもソフトも、全部違います。その中で、今後、どのようなまちづくりを目指すべきかを考えてきたのです。そして、サステナブルな地方創生も、色々な世界的なトレンドがありました。

皆さん、SDGs が広まる前は、どのような動きがあつたかご存じですか。SDGs が出始めたのは、2010年代に入ってからですが、それ以前にも、実は、持続可能な社会をつくる動きがありました。端的に言うと、エコビレッジづくりや、今ちょうど写真に出ているトランジション運動が世界中で広がっていました。私は、これらの草創期からずっとウォッチして、現場でも体感してきた経緯があります。

今写真に写っているのは、イギリスのトッドネスにあるシューマツハカレッジです。今でこそ日本人にだいたいは知られるようになったのですが、トランジション運動という、まさに、日本で言うとローカル SDGs を推進するコミュニティカレッジです。持続可能な社会を体現しようとして、町ぐるみで運動を始めた町がトッドネス。そこにシューマツハカレッジという拠点がありまして、私も現場で学びました。色々な国からサステナビリティに関心を持つ人が来て、研究・実践活動をするわけです。

写真では農業体験をしているように見えますが、世界中の人が「農的な暮らしってこうだよ」と現場で学んで、私も「そうか」と理解を深めているシーンです。当時、日本人は全然いなかったのですが、このように現場で学んでいました。そのときに、「これ、どこかでやったことがあるぞ」と気付きました。演習で色々理論的に解説されるのですが、「これ、どこかで聞いたことがあるな」と。

例えば、コンポストという“たい肥作り”の演習では、「これは、こういう原理で、こうしてこうすると、循環していくんだよ」などと色々語られるのですが、「それ、うちの田舎で普通にやっていたよ」ということに気付くわけです。

すなわち、日本で当たり前のようにやられていることが、理論的に体系化されて、世界中で広がり、トランジションタウンの連合体としてトランジションネットワークがつくられていたわけですね。そこで、確信しました。海外で先端事例とされているサステナブルな地方創生というのは、実は日本の地方が日常で実践してきたことだと。

例えば、たい肥作りでは、ゴミを出さずに地域で循環させます。それは、日本で昔からやっていたよ。しかし、それを「エコシステムだ」「循環型社会だ」などと言うと、それっぽく聞こえます。海外の皆様は、それらを「先端事例」と呼んでいるだけの話です。しかし、日本はずっとそれを当たり前のようにやってきたわけです。

ですから、お伝えしたかったことは、すでに地域にあるサステナブルな取組を編集するこ

とによって、実は「今やっていることが、世界の最先端になるのですよ」ということです。

今日、井原市さんと真庭市さんから具体的な事例のお話でしたが、本当に沢山、地域のサステイナブルな取組が現場にあると思うのです。実際に私も現場に行かせていただいて、そのようなことを感じています。

ただし、それをそのまま日常で当たり前のように、普通にやりすぎています。これはとてもいいことですが。ですから、それを意識的に発見して、時代の中で新たに編集してあげること。これによって、世界最先端のローカル SDGs になっていくのだということをお伝えしたいと思っています。

これを、「価値の再定義」と言います。地域の中にある取組について、これまで当たり前のようにやってきたのだけれども、現代の言葉で定義してみます。

例えば、当たり前のようにやってきた「地域のごみ拾い活動」や「たい肥作りの活動」、若しくは、地域の山村に入って大人と子どもが共有して学ぶ「環境理解の場づくり」。そのような取組を、このコロナの時代の中で再定義すると、「コロナ禍において、人と人とが健全にコミュニケーションできる場である」「人と人とが安全につながる場所である」「自然を体感できる場所である」というような言い方に変換することができます。そうすることによって、「価値が再定義される」ということになります。「世界最先端のローカル SDGs」として再定義されて、世の中に展開していくことができるわけです。

我々には、幸いにも自然と共存共生した縄文の DNA があると思っています。何せ 1 万年以上の実績があります。このような国は、世界中探してもなかなかないです。これは考古学の世界でも分かっておりまして、我々にはその実績があります。

ですから今、弥生型の思想に偏ってきてしまった現代の在り方を見直して、そこに縄文のエンジンを組み入れることによって、何か今から新しいことを始めなくても、今ある取組を少しだけ編集して、そこに今日お話ししてきました価値創造型の超絶まちづくりを融合させる。イノベーターたちが実践している地域のビジネス化を行う。つまり、「こういうことをやりたいんだ」という思いからスタートするのだけれども、その後には地域の課題との紐付け、環境の課題との紐付けをしてあげることで、もう立派な地域循環共生圏づくりの取組へと様変わりしていくと思っています。

本日は、ローカル SDGs、そして超絶まちづくり、それを踏まえると、地域循環共生圏づくりの実現ができて、さらに、それは世界をリードする日本へ転じるポテンシャルがあるよというお話をさせていただきました。

ビジネス化というと、何か大層なことのように聞こえるのですが、今のうちに、きちんとプロセスを分けて考えていただくと、できます。ただし、やるときに今のような全体像を持って取り組むことと、それを全く知らずして取り組むこととは、やはりどうしても大きな差が生まれてくるわけですね。

今日、お話ししてまいりました、ローカル SDGs の超絶まちづくり。人と自然が共存共生する地域循環共生圏を作っていくということは、実は日本には本当にベースがあるのです。それ

は、縄文1万年の実績です。

その上で、ローカルSDGsを事業として成り立たせていくためには、イノベーターたちが暗黙知として持っているやり方を、うまく地域の中に結び付けることが重要です。これによって、皆さんの活動が一気にブレイクしていくことになろうかと思えます。

最後に、やはり現代は、デジタルをうまく活用する必要があります。今日はデジタルマーケティングという話をさせていただいたのですが、これも皆さんのリテラシーとして頭の片隅に入れておいていただくと、今日やった取組が今日のうちに日本中に知れ渡る状況を作ることができます。「ほんとか？」と思うかもしれませんが、私は実際にやっていますから、現場できちんとできます。

ただし、デジタルリテラシーを持っている人をチームの中に入れておかないと、皆さんがどんなに良い取組をしても、関わっている人しか知らないという状況になります。ですから、レバレッジを効かせて、日本全国へ、そして世界へと展開されるローカルSDGsの超絶まちづくりを、ぜひ皆さんと一緒につくっていきたいと思っております。

皆さん、ご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。

司会：

お話を聞きながら、そう言えば、「もったいない」という世界共通語もあるな、日本ではそのようなことが実際にずっとやってきたなと感じました。「突き抜けたアイデア」というお話がありましたが、「無理」や「無駄」ではなく、そこにヒントがあり「ワクワク」がビジネスになるという事例は、大変参考になりました。興味深いお話を、本当に谷中様、ありがとうございました。

続きまして、パネルディスカッションに移らせていただきますが、本日はここ岡山県の会場をホスト会場に、東京都ともつないでオンラインシンポジウムとなっております。

パネルディスカッションの準備の間に、開催地である岡山県の紹介VTRと、先ほどご講演いただきました谷中様が紹介してくださいます、「地域循環共生圏ローカルSDGsの創造について」のVTRをご覧いただきたいと思えます。

司会：

VTRをご覧いただきました。

それではここからは、「地域資源を磨いて地域活性化につなげるためには？」をテーマに、パネルディスカッションを行ってまいります。

まずは、パネリストの皆様からご紹介させていただきます。ホスト会場から、岡山県真庭市副市長、吉永忠洋様。

吉永：

よろしく申し上げます。

司会：

同じくホスト会場から、岡山県井原市美星町観光協会副会長、三宅輝明様。

三宅：

よろしく申し上げます。

司会：

東京都の会場から地方創生イノベータープラットフォーム I N S P I R E 代表理事、BBT 大学経営学部グローバル経営学科学科長・教授、谷中修吾様。

谷中：

よろしく申し上げます。

司会：

同じく東京都の会場から、環境省大臣官房環境計画課企画調査室室長、佐々木真二郎。

佐々木：

よろしく申し上げます。

司会：

そしてファシリテーターをお務めいただきますのは、東京都の会場にいらっしゃいます環境省地域循環共生圏プラットフォームコーディネーター、高橋真寿美様でございます。

高橋様の背景は、天神峡とさせていただきます。小田川の溪谷およそ1キロにわたり、カエデ、モミ、カシなどの巨大な木や老木が清流に影を落とす天神峡は、自然の変化により、四季折々の姿を見せてくれます。特に紅葉などが有名ではございますが、高橋様は、ご覧になられたことがありますか。

高橋：

ご紹介ありがとうございます。

天神峡は、まだお伺いできていないのです。来年の秋に、新型コロナを取り巻く状況が改善していたら、ぜひお伺いしたいと思っています。

司会：

ぜひ紅葉と合わせて井原の星空もご覧いただきたいです。落ち着いた頃に泊まりがけでお越しただければと思います。

それではここからの進行は、高橋様、どうぞよろしく願いいたします。

## 6. パネルディスカッション

高橋：

では、ここからはパネルディスカッションということで進めさせていただきます。ファシリテーターを、私、高橋が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

今回のパネルディスカッションのテーマは、「地域資源を磨いて、地域活性化につなげるには？」というテーマで進めていきたいと思っています。

今回この放送をご覧になってくださっている皆さんは、きっと様々な立場の方々だと思うのですが、何かしらの形で「地域をよくしていきたい」「変えていきたい」、そのように思っている皆さんではないかと思っています。

そのような皆様にとって、地域循環共生圏とは何か、地域資源を磨くというのは、どのようなことなのか、具体的にどのようにしたら地域活性化につながるのか、そのようなことについて、分かりやすく、かみ砕いて進めていければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

では早速ですが、佐々木室長にご質問させていただきます。地域循環共生圏づくりにおいては、地域資源を磨くことをとても大切にしているというお話がありました。地域循環共生圏づくりにおいて、地域資源の発見や磨き込み、このようなことが重要な理由、このあたりを改めてお教えいただいてもよろしいですか。

佐々木：

地域資源と呼ばれるものは、色々あると思うのですが、例えば井原市さんの美星町の取組は、星空を資源としてとらえているということです。

まず地域資源として、一番活用できるもの、しやすいものは、地域の宝だと思っています。地域の宝とは、その地域が地域の外の人たちに誇れるものです。このようなものは、大体、地域に昔からの歴史があったり文化があったり、ストーリーが付いていたり、そのような深い深い地域の人との関わりがあってつくられてきたものです。そのような地域の宝を資源として活用していくことが、やはり地域を活性していくためには大きな武器になっていくのではないかと考えているわけです。

ただ最近、私はこの地域循環共生圏の取組をやっていて思うことは、地域の資源はどれもこのようなものばかりではないかと、地域で余っている物や処理に困っている物も、実は地域資源になったりするのですね。

最近、廃棄物の関係の人たちと話をすると、皆さん口をそろえて「ごみは資源だ」と言うのです。実際に廃棄物をリサイクルして、それを資源として活用することで、新しいビジネスを生み出していたりする方々もどんどん出てきております。

ですから、このような地域に豊富にある物、宝、若しくは価値に気付いていない、まだ見直



されていない物、そのような物が、実際に地域資源としてこれから活用していくことができ、そしてそれが地域の外にアピールしていくものとして大事だと思っています。ですから、地域資源をもう一度みんなで見直して、磨くことが大事なのではないかと、共生圏づくりでは考えているところです。

高橋：

佐々木室長、どうもありがとうございました。地域資源は地域の宝、昔から根付いている大切な物という見方もありますし、一方で注目すべきは、一見すると宝ではない、もしかしたら多すぎて困っている物、余っている物、そのような物にも目を向けることによって、もしかしたら地域資源にもなり得るのかもしれないというお話を頂きました。

このあたりのお話は、先ほど谷中さんがおっしゃってくださった、「地域の取組を再編集する」「価値を再定義する」といったお言葉とも、非常につながってきているなと思っています。

ぜひ谷中さんにお伺いしたいのですが、もしかしたら地域の中では気付いていなかったかもしれない価値を、再定義、再編集された具体的な取組の事例などがあったら教えていただけると嬉しいです。

谷中：

ありがとうございます。そうですね。私が事例を出すまでもなく、実は今回の冒頭の事例紹介を頂いた中でも、そのヒントが隠されていたなど、私は思っていました。

例えば、先ほど、星の歌のカラオケのお話がありましたね。あれはとても面白いなと思って聞いていたのです。普通のカラオケだったら、ただのカラオケです。ですが、「星の歌のカラオケを、星の郷で歌う」となったら、大きな付加価値が付くわけですね。これが、いわゆる価値の作り方だと思います。

それから、真庭市さんにも本当に色々な資源があります。蒜山高原に何度か出入りさせていただいておりますが、この先、ローカル SDGs を発信する拠点ができるという情報を耳にしておりまして、後でお話があるかもしれません。

例えば、真庭の場合ですと、単なる SDGs の取組というよりは、私から見ると町ぐるみ全体で、地域住民みんなが SDGs に取組んでいると強く感じます。ですから、価値の付け方としては、「地域ぐるみで SDGs が実装されている」ような言い方が価値になると思います。

先ほど、私が事例と出した筋肉かき氷がありまして、「一体、これが何で地域循環共生圏づくりとつながるんだ」と思った方もいるかもしれません。価値の付け方というのは、要は、ロジックをどう付けるかという話ですね。

先ほど佐々木様にご指摘いただいたように、地域のあらゆる資源が素材になるのだと思います。そこにどのように価値を定義するかは、どうストーリーを付けるかともいえるわけです。ですから、そのストーリーを紡ぐことによって、その地域にしかないオンリーワンの価値にすると、「そこにしか、行かないとできないね。だから行こうね」という話になるのかなと思っ

ています。

従って、複雑な話ではなく、ちょっとしたストーリーの付け方によって、みんなが「いいね」という状態がつけられるのではないかと思います。

高橋：

谷中さん、どうもありがとうございました。地域資源を磨くとはその地域にしかないストーリーを編集していくことによって磨かれていくのではないかというお話を頂きました。ありがとうございます。

先ほどお話しいただいた、美星町さんと真庭市さんのお話について取り上げていただきました。ここでぜひ、岡山会場のお二人にもお伺いできればと思っております。

まず、真庭市の吉永副市長にお伺いしたいのですが、改めて、自地域の地域資源とは何だとお考えになっておりますか。

吉永：

先生方のお話もお聞きしながら、実は「地域資源は人だ」という考えを持っているのですが、「物」という意味では今日も出てまいりましたが、やはり木だろうと思っています。面積の9割近くが森林というところですので、木の文化というものを今ちょっと考えていました。

ちょうどたまたま郷原漆器がここにあるのですが、これは栗の木をくりぬいて作っている、いわゆる漆器です。非常に今、価値が高いものです。歴史の中で、やはり「木を使ってきた真庭」というものがあります。

実は先ほどの話の中で、歴史に踏み込んでいるという話を少しだけしましたが、大御堂という建物があります。そこは、地域の人が信仰の場所として、色々な活動をするわけです。その木が平安時代の木材だと最近分かってきました。古くから、その物がずっと何百年も生き残っているという事実、まだ使われている事実、また明治時代の遷喬小学校の木造建物は国の重要文化財です。

そして先ほど少し触れていただきましたが、実は蒜山にCLTのモニュメントを今、建設しております。これは東京築地にオリンピック用にとということで、今、隈研吾さんが二十数メートルのCLTのモニュメントを作られていたのですが、それが今、真庭に移築されています。真庭の木で造ったので、今、真庭に里帰りをしています。新しい真庭の文化、木の文化の拠点になるだろうと思っています。

隈先生には真庭のことを、「木の聖地」と呼んでいただきました。そのような意味で、シンプルに言うと「真庭の地域資源は、木」だという言い方ができるかなと、今思っているところです。

高橋：

ありがとうございます。真庭の地域資源として、まずは大前提といえますか「人だと思って

いる」というお話、あとはさらに、「木」があるとお話をしていただきました。今おっしゃっていただいた、「木」というのは、先ほどの地域資源の中での地域の宝にも該当するものですね。どうもありがとうございました。

次に、井原市の美星町の三宅副会長にお伺いしたいのですが、井原市さん、美星さんの地域資源ということは先ほどおっしゃっていただいた、「星」になるかと思うのですが、改めて、地域資源をどのようにお考えになっておりますでしょうか。

三宅：

もちろん先ほど説明させていただきましたし、今、話していただきましたように、「星」しかないと思っています。先ほども少し話に触れましたが、この星というのは最初に美星町の名前から始まっています。その頃もそれ以降もそうですが、全く星がきれいに見える町などとは、町に住んでいる人たちは、いつもあるもの、当たり前のもんと思って、感じて今まで生きてきました。

それを教えていただいたのは、まず、「美星町」という名前を作ってくれた人たち、そして星に関係を持った詳しい人たちで、「美星の町を守らなくちゃいけないという運動を起こさない」また、「条例を作りなさい」と言ってくれた外の人たちです。

そして今回、星空保護区を目指していくに当たって、「そういった制度があるよ」「そういった制度をクリアしていくには、こんなものが必要だよ」「じゃ、こんなものを作ってあげますよ」という外の皆さんからのメッセージで、今まで進んできたように思います。これが、一つの財産だと思います。

言い方がおかしいかもしれませんが、それぞれの節目節目の色々な奇跡や応援、外からの目線ばかりだったのです。しかし、それに対して今ここで、美星町の住民の一人として、これから美星町を盛り上げていく一人として、恩返しのとこだと思っています。人脈それこそが観光やこれからのSDGsの資源の目玉ではないかと、星もそうですが、人とのつながりそのものが、資源だと思っています。その資源を利用して、これからはもちろん美星には、高原地方のおいしい農産物や肉製品など全部あります。そのようなものを味わってもらうことも資源だと思っています。

先ほど言いました恩返しのつもりで、これからそのあたりに注目して、やるのではなくて、今、自分の心では先ほどの先生のお話を聞きまして、「やりたい」と思っていますので、それが資源かなと思っていますところでは。

高橋：

熱いメッセージをありがとうございます。外の皆さんからのメッセージがあったというお話でした。

何か先ほどのお話をお伺いしていると、本当に美星町と星の歴史はとても長いのだなと思ったのですが、その中でやはり外の方からの応援メッセージがすごく大きな影響があったという

お話でした。

ここでぜひ谷中さんにお伺いしたいのですが、このような地域活性化の文脈の中で、外の方からの影響は、何かどのようなものがあると思いますか。

谷中：

ありがとうございます。そうですね。やはり外からの目線で発見するという。「再発見」という言い方が正しいかもしれませんが、これは、とても大きいと思います。

ただし、いわゆる、よそ者ということだけではないのです。私が全国区で現場を見ていて思うことは、一度、地域の外に出た方は、外の目線を持つわけですね。ですから、その方が戻ってくる、Uターン、Iターン、そのような方は、外の感覚も持ちながら、自分の地域のよさを発掘しやすいです。

そのような方々をプロジェクトに巻き込んでいただくと、今、日常にある物を「これって、やっぱり価値だよ」「これって実は都会の人にウケるよ」ということに気づきやすいということが言えると思います。

必ずしも、全てよそ者を入れようということだけではなくて、地域の中に今いる方だけでも、例えば、ご結婚で外からいらっしゃった方も当然沢山いるわけで、そのような方にちょっと聞いてみるというアクションは、とてもいいなと思います。

ちなみに、私は、星つながりで言うと、月と火星に土地を持っています。世の中には、そのようなサービスが結構前からあるのです。要は、そのような遊び心で、例えば、星だったら「こういうこともできんじゃね？」というようなことを言う人が絶対いるのです。

真庭市さんは、真庭市さんで先ほど里海米の話もありましたが、「里海米もこういうことをやったら、もうちょっと面白くなるんじゃね？」というようなことが、外からの目線、若しくは、中にいらっしゃる方だけでも外を知っている人の目線だと、面白くなりやすいと思います。

高橋：

ありがとうございました。月と火星に土地をお持ちだったのです。月の土地を買えることは聞いたことがあったのですが、火星も買えるとは知らなかったです。ありがとうございます。

改めて地域の価値の再発見にということに対して外の目線、特に例えばUターンなど、中の視点も外の視線も両方持っていらっしゃる方に話を聞くことは、とても有効ではないかというお話でした。ありがとうございます。

本当に、中の人も外の人、一体となって地域づくりをしているということで、やはりイメージが湧くのが真庭市さんです。私のイメージだと、本当に真庭市さんでは多様な方が活躍されていらっしゃるイメージなのですが、ここでぜひ吉永副市長にお伺いしたいのですが、真庭市で多様な方が活躍できる理由は、どのあたりにあるとお考えですか。

吉永：

最初は、地域が待ったなしという危機感を持つことだろうと思います。できたら、よそからの人は入れずに自分たちだけでやっていけたら、それに越したことはないわけですが、それではこの地域が次の世代につながらないと覚悟を決めることが、やはりこれまでの私たちの活動の中で、一番大きかったように思います。

外の知恵を受け入れる気がないと、ものが始まらないと思います。みんな、何か「活性化しよう」と言って、味噌を造って終わりという世界にしかならないと思うのです。

先ほどもお話がありましたが、外の人が、実は1回来てイベント的に何かをやって帰っていくというような人たちではなくて、ずっと一緒につながっている、できれば毎日一緒にいければいいけれども、少なくとも月に1回以上はやってきて地域の人ととことん話し合う、そのような人たちと一緒にやることによって地域は一つになっていくと、これまでの経験から思っています。

地域の思いというものは絶対つながっていきたい、この家を次の世代に残したいということですが、そこからもう一つ出るためには外の知恵が必要だし、それを実現したところが成功しているのが実際のところだろうと思っています。

高橋：

ありがとうございました。外の知恵を受け入れるカルチャー、そのようなものがとても受け入れに当たっては大切であるというお話を頂きました。ありがとうございます。

次に、ぜひ地域に様々なパートナーを巻き込んでいって変えていくということに関して、少しお話を深めていきたいと思っています。

先ほど三宅さんのお話で、パナソニックさんと一緒にされたお取組のお話をお伺いしました。改めて、どのようにしてパナソニックさんを巻き込んでいかれたのか、そのプロセスをもう少し詳しくお伺いしてもよろしいですか。

三宅：

先ほどは時間がなくて、なかなかその踏み込んだところをご紹介できなかったのですが、色々考えた中で、星空保護区を取りにいくというときに、やはり照明が、もう日本にはないことが分かりまして、その開発が絶対に必要なことであることが分かりました。

その中で、昔パナソニックが松下電器のときの、美星町時代に少し星や明かりに対するお付き合いがありました。そのときもパナソニックさんの方のご提案で、「星を守る」という当時の照明の広告を美星町で繰り広げられたことがありました。その縁もありまして、もう一度やるのであればパナソニックさんをお願いしたいという思いで始めました。

それも、やはりビジネスが絡んできますので、先ほども言いましたように、もちろんこちらを売り込むといいますかお願いに上がるに当たっては、もう「とにかく日本にないということですから、どこかが作らなきゃいけない。もうそれはパナソニックでしょ」というスタンスで

行かせていただきました。

そこにはやはり日本中に、「星空保護区を取っていこう」という町はこれから出てくるはずですし、それに伴って絶対に防犯灯の必要性が出てきますから、十分なビジネス的なメリット、必ず日本中にマーケットはありますということを強くPRさせていただきました。

それと「よければ」という形で、そのような付き合いもありましたので、「30年前に日本の星空、美星の星空を守る、日本で初めて星空を守る条例を作った町が選んだのが、パナソニックです」「星空に優しい町が選んだのは、パナソニックです」という、そのあたりの、嫌らしい言い方ですが、心を動かすような、オーバーに言うとセールストークをしてきたように思います。

高橋：

ありがとうございます。お話をお伺いすると、かなり具体的な課題意識があってパナソニックさんにご相談に行かれたのだなと思いました。ありがとうございます。

ここで谷中さんにお伺いしたいのですが、地域の中だけでは実現したいことができなさそうだと感じたときに、地域以外のところに目を向けて力を借りようということは他の地域でもあるのではないかと思うのですが、地域の外の力を借りていくときに、そのプロセスで谷中さんが大事だとお考えのことを、ぜひ教えていただけると嬉しいです。

谷中：

ありがとうございます。そうですね。やはり外の力を借りたいと思っても、どのようにつながったらいいかは、皆さんが悩まれるところかもしれません。そのようなときに、「地域循環共生圏プラットフォームがありますよ」と言うと、何かすごく宣伝っぽいのですが、それは間違いなくあると思います。

色々なプラットフォームとつながるという観点で、汎用的にお伝えしたいと思います。国のプラットフォームもあれば、民間やNPOのプラットフォームもあります。プラットフォームと言うと固く聞こえますが、簡単に言うと、会合です。

今ですと、オンラインセミナーが数多く行われていますし、地域づくりや地方創生に興味がある人が集まるイベントというのは、結構あるわけです。ウェブの検索で、「地域づくり イベント」などとすると、一気に出てきます。

そのようなところに、まずは参加してみましよう。そうすると、必ずそこにはオーガナイザーという、その場を企画する人がいます。私もその1人です。そのような人をプロデューサーやオーガナイザーという言い方をします。そのような人とつながると、一気に広がります。

なぜかという、私は私の領域で日本中の人とつながっていますし、日本には色々なオーガナイザーがいて、その人はその人の専門分野で日本中の人とつながっています。

ですから、イベントにまずは出てみて、「面白いな」と思ったら、その中核にいるオーガナイザーとつながって、「実は、うちもこういうことをやりたいんですけど」と相談していただ

くと、かなり速いです。

もちろん、国がやっている環境省さんの地域循環共生圏プラットフォームも有効です。私自身も、このプラットフォームがきっかけで真庭市さんとのご縁ができて現地に行かせていただいて、本当に感謝しているのです。今日お話を伺って、美星町にもぜひ行ってみたいなと本当に思いました。このようなことかなと思います。

高橋：

どうもありがとうございました。今、プロデューサー、オーガナイザーというキーワードが出てきたのですが、これはどのような方として谷中さんはご定義されていらっしゃるのですか。

谷中：

簡単に言うと、飲み会の幹事のようなものですね。このように言うと、多分、分かりやすいですね。

高橋：

はい、分かりやすいです。

谷中：

国で言うと、国の幹事もいるわけです。おそらく、今日の場合で言うと、佐々木室長は地域循環共生圏の幹事という言い方も正しいかもしれませんが。そのようなことです。

いろいろ横文字で表現されがちですが、「企画する人」と言う日本語で表現するとよいですかね。そのようなハブになっている人とつながるということですね。

高橋：

はい。ありがとうございます。飲み会の幹事というのは分かりやすいですね。そのような方がきつと地域にもいらっやって、何かしら新しいことをしたり企画をするときのハブになっている方と、ぜひ最初はつながるといいのではないかというアドバイスだったかなと思っております。ありがとうございます。

ここで、佐々木室長にお伺いしたいのですが、今、谷中さんから「ぜひそういうときは地域循環共生圏プラットフォームを使ってください」という素敵なコメントがあったのですが。改めて、佐々木室長は地域をこれからよくしていきたいという思いがある人にプラットフォームをどのように使ってほしいと思っているのかをコメントいただいてもよろしいですか。

佐々木：

飲み会の幹事の佐々木がお答えしますと、まさに地域循環共生圏のプラットフォームで皆さ

んにご提供したいものは、谷中さんがおっしゃったのですが、飲み会のような場だと私も実は思っていました。

例えば、先ほど来あった、地域の中の人と外の企業の人をつなぐ、マッチングなどと呼ばれたりするのですが、そのようなことをやろうと思うと、なかなか難しいのです。ホームページに、ただ、「地域の課題はこんなです」「企業さんはこれだけ登録されていますが、この企業は、このような得意なものを持っています」と載せていても、全然マッチングは起こらないのです。

よく考えてみれば当たり前で、みんな2、3個検索して、だんだん疲れてきてしまって、その後は検索ができないのです。ただ、飲み会の場も含めて、そのようなオンラインの場も含めて、人が直接会う場も含めて、人と人が会って話をしていくことがあると、2、3個ではなくて、もっと沢山の事例がそこで共有されたり、その場で「ちょっと面白いね、それ」というような発見があったり、そのようなことが起こってきます。やはり人と人が直接会話することの、何と申しますか、化学反応と申しますか魔力と申しますか、突破する力と申しますか、そこにとても私は期待しています。

ですから、地域循環共生圏のプラットフォームでも、そのように人と人が話ができる場を沢山作っていきたくと思っています。なかなか国のプラットフォームというと、「距離が遠いな」と思われるかもしれませんが、ぜひそこに皆さん気軽に参加していただいて、気軽に発言していただいて、そこで出会いをつくっていただく、その出会いこそが次の事業につながっていくと私は考えております。

高橋：

ありがとうございました。まさに先ほど谷中さんがおっしゃってくださったような、「飲み会のような場所にしたい」というお話を頂きました。「地域循環共生圏プラットフォーム」で検索いただきますと、そのような場が載っているところにも出会えると思います。ぜひご関心がある方は見てみていただけると嬉しいです。ありがとうございます。

今は、環境省さんが作っておられる地域循環共生圏プラットフォームのお話なのですが、このようなプラットフォームの場は、地域にもあるのではないかと考えています。

先ほどのお話の中だと、真庭市さんの真庭なりわい塾も、人と人が出会って化学反応を起こすという、ある種、プラットフォームのような機能を果たしているのではないのかなと思いつながりながらお話を伺っておりました。

ここで吉永副市長に、改めて、真庭なりわい塾は、どのような目的で設立されていて、どのようなところを工夫して運営されていらっしゃるのかということをお伺いしてもよろしいですか。

吉永：

最初にこれをやろうと思ったのが、先ほども言いましたが、ある程度、地域循環、経済循環の仕組みができてきて、これをつないでいく人材、人を、やはり獲得していきたいという思い、



簡単にいうと移住してきてくれる人を獲得したいという思いがありました。

ということで、「なりわい塾」という新しい仕組みの実施をしたわけです。我々も、やる中で色々と一緒に、行政も勉強をしてきました。やはり、単に地域のために人が入るのではなくて、人が生きるといこと、都会の人が例えば自分らしく生きるとい視点、そして先ほども申しましたが、地域が未来に地域をつないでいきたいという思い、そこが自然と重なり合っていたなと思っています。

地域の話をする、今まで、昭和から平成にかけては「地域はコミュニティ」という言い方を、私はしてきたのだと思います。コミュニティを維持するためには、行政が補助金を出します。お金を出すことによって地域が守られてきました。

ですが、平成後半から令和の時代には、やはり自治だろうと思っています。思いを持った自分の生き方を持った人たちが、その町で多様な価値観を持ってその地域で生きていくことが一番大事だろうと思っています。

そのためには色々な価値観の人がそこにいます。そうしてそれを認め合う社会、それがSDGsそのものだろうと思っていますし、そのためになりわい塾が果たしている役割は、本当に多いと思っています。

今は中和だけでなりわい塾をやっていますが、別の地域でも今やろうということで行っており、そこから集まった人たちが、色々な次の経済の仕組みやビジネスチャンス、そのようなものを真庭に提供してくれています。ゼロからイチへという話がありましたが、1から2、2から3に今、真庭のなりわい塾は前に行っていると、私は実感しております。

高橋：

どうもありがとうございます。先ほどの発表の中でも、うなぎ職人の方が移住されたときに、それが「よかったね」というよりは、それはあくまでも結果であって、真庭市の生き方に共感してくれた人が移住をしてきてくださることが大事なのだというお話が大変印象に残っております。ありがとうございます。

次に改めて、地域資源を発掘して磨いた後に、具体的に地域ビジネスにどうつなげていくのかというところに話を広げていければと思っています。

美星町さんから、今は星の郷まちづくりコンソーシアムといった組織を立ち上げて、ここからさらに地域活性化につなげていきたいというお話がありました。今後、具体的にどのようなことをされていかれたいと思っているのかを教えていただいてもいいですか。三宅副会長、お願いいたします。

三宅：

今ご紹介いただきましたように、このたび、星のまちづくりコンソーシアムを立ち上げました。振り返ってみますと、今まで美星町は「星の郷、美星を知ってほしい」「知ってほしい」というこちらからの一方通行といえますか、発信そのもの、発信発信発信で進んできたように

思います。それぞれの皆さんに受け入れられて、注目をされまして、星の街イコール美星というところまでは行きました。

ですが、今まで発信しすぎて、外からの声や外からの目を見たところをどうも見失っていたといいますか、押し売りをしていたようなところもあります。今回コンソーシアムを立ち上げていただきまして、美星以外の人から美星の色々なところを見つけていただくことができつつあります。

そのような中で、外から見ていただいた色々なものが必要だということも、だんだん分かってきました。しかし一番分かっていることは、星はもちろんあるのですが、星は夜ですから、美星にやはり長く滞在してほしいということになれば、もちろん、今まである農産物もありますが、色々な景色など、もちろん星に先ほどこちよっと触れましたが、星を解説できる方も美星には少ないです。今までは星は当たり前にあったものだから、正直、何も勉強はしていません。ですから食や施設、星を語れる人など、本当にこれからやることは沢山あります。

まだ、「これをやる」ということを決めかねているといいますか、今コンソーシアムを作っていたいただいたので、本当に外からのご意見を頂きながら、地元美星町のみんなが気付かなかったところをこれから掘り起こしていきます。

おそらく、もうすぐに星空保護区の認定を受けられると信じています。そうしますと、今からでも遅いぐらいだと思っていますので、色々なことを一遍に進めていくには、やはり地元の人だけではだめなので、本当にありきたりの言葉ですが、地元美星町の町民が素直な心になって外からの皆さんのご意見を頂いて、美星町のためになることをこれからやっていきたいです。

特に今回、星空保護区の照明を開発して取り付けるに当たって、クラウドファンディングを行いました。半数以上、7割、8割というのは言いすぎかもしれませんが、美星町、井原市以外の方からの応援が本当に多かったです。そのぐらい美星町の星空保護区を期待されてということが分かっていますので、それに応えられるまちづくりをしていくことが必要かなと今感じています。

もう、ここで一言で「これやるんです」ということが言えません。「あれもやりたい」「これもやりたい」ということが沢山あるのが、今の本当の気持ちです。

高橋：

ありがとうございます。「あれもやりたい」「これもやりたい」という展望が沢山あるというお話を頂きました。これまで外からのメッセージというところもありつつ、美星町のまちづくりを進めてこられたということですが、外と中が融合して共にやっていくためのプラットフォームに、きっとそのコンソーシアムはなっていくのだらうなと思いました。

ここで谷中さんにお伺いしたいのですが、改めて、これまで様々な地域ビジネスを推進してこられる中で、やはりイノベーター型、アイデアスタートのビジネスづくりも大切であるというお話を頂きました。

そうしたアイデアを持っていらっしゃる方は、地域にいらっしゃるかと思うのですが、大事なことはその後で、そのアイデアを形にしていくための協力者が集まるのかどうか、具体化していけるのかということだと思うのです。そのようなイノベーターのアイデアを具現化していける地域には、どのような特徴があると思われますか。

谷中：

ありがとうございます。やはり、ビジネス化は、事業として成立するようにするということ。これには、非常に大事なポイントがあります。

といいますのは、地域の中で「ビジネスを起こします」というときに、いわゆるメンター、インキュベーター、VCなど、「ビジネス化を応援しますよ」という応援団は結構出てくるわけです。

しかし、ここで重要なことは、そのように自称メンター、自称インキュベーター、自称VCなどと言っている人が、実はビジネスを自分で立ち上げたことがないというケースが多いということです。その方を否定している訳では全然ないのですが、自分でビジネスをやったことがある人にきちんと入っていただかないと、本当のビジネス化というのは、なかなかできないわけです。

地域の中で、創業者と言われる人は、結構いらっしゃるはずですが。これは個人事業単位でも、中小企業を立ち上げてやられている法人事業単位でも、すべて含みます。ビジネスを本当に起こしたことがある人を仲間に入れていただくことが、やはり事業化するという意味では、成否を分けているという印象です。

実際に、私も色々なビジネスの立ち上げをしていますが、自分で立ち上げた経験が1度や2度というよりも、三桁は超えるぐらいの数をやっています。ですから「このときは、こういうふうにはやったらいいね」ということを即座に言えるわけです。最後は、自分でやったことがあるかどうかという経験が、やはり大きく影響してきます。

したがって、地域の皆さんの中にも「あの人に聞いてみたら？」という、創業経験のある方は結構いらっしゃるわけです。しかも、そのような人たちは、割と、お声掛けされることを待っていたりします。「何で俺んとこ、来ないんだよ」というように思っていると思うのです。そこをうまく入れてあげるのです。これが、うまくいっているところと、そうでないところの分かれ道になっているかと思います。

高橋：

ありがとうございます。イノベーターに地域でより生き生きと活躍してもらうためのメンターとして、やはりご自分も起業をしたことがあるような方がいいのではないかと、あとは地域にいらっしゃるそのような方をぜひ巻き込みながら進めていくといいのではないかとコメントでした。ありがとうございます。

まだまだお伺いしたいことはあるのですが、そろそろ時間になりましたのでクロージングに

向かっていければと思っています。

最後に皆さんにお伺いしたいことは、この動画を見ていらっしゃる皆さんに対するメッセージです。冒頭にもお伝えしましたが、きつこの動画を見てくださっている方というのは、何かしらの形で、「地域をよくしたい」と思っている皆様だと思っています。そのような皆様に対して、ぜひメッセージを送っていただければと思っています。

最初に、吉永副市長にお伺いしたいのですが、既に地域循環共生圏を実践されていらっしゃる立場から、これからそのようなことに取組んでいかれようという方に対して、最後にメッセージのコメントを頂いてよろしいでしょうか。

吉永：

そのようなことを言える立場ではないですが、やはり、私たち真庭ができることは、日本の中山間でできることだろうと思っています。中山間地域の幸福というのは、やはりみんな日本中の人が考えているのだらうと思います。

ぜひ一緒に色々な悩みを語り合いながら共に考えていく仲間に、皆さんとなれたらと思っています。ぜひ真庭においでください。

高橋：

ありがとうございます。真庭市さんのような方が先を走っておられることは、本当に中山間地域の皆さんにとって、とても励みになることだと思っています。ありがとうございます。

次に三宅副会長、お伺いしてもよろしいですか。

三宅：

副市長に「言う立場でない」と言われたら僕などは全然言う立場ではないですが、こちらから言うのではなくて、今、美星町も SDGs などが、まさに始まったばかりです。逆に、今日見られた日本全国、また世界の方には「こんな井原市美星、こんな案があるよ」「こんなやったらいいんじゃないの」ということをどんどん伝えてほしいなと思います。

今の美星町はそれを必要としています。本当に地元民だけでは分からないところが沢山で、これからやっていこうと思うので、伝えることではなくて伝えてほしいと思います。どのようなことでもいいので案をください。もうその一言だと思っています。

今日はこのようなスタジオですが、美星は本当に星のきれいなところですよ。美星町は本物を用意して待っていますので、いつでもお越しください。つくりものではないので、一回来ていただいたら毎回違う姿を現してくれます。ぜひ本物を見にきてください。よろしく願います。

高橋：

ありがとうございます。ぜひどんどんアイデアを、というコメントでした。私もコロナが落

ち着いたら星を見に行きたいなと思っています。ありがとうございます。

次に谷中さんにお伺いさせてください。この動画を見ておられる、「地域をよくしたい」と考えている個人の方が、地域をよくするために何かしらの一歩を踏み出すとしたら、どのようなことがありえると思いますか。ぜひアドバイスを頂ければと思います。

谷中：

ありがとうございます。課題解決という視点も大事ですね。「環境問題を解決していこう」という思いで活動を始めるともOKだと思います。

一方で、「環境のことはそんなに詳しくないけども、自分はやりたいことがあるぞ」「地域を楽しくしてみたいぞ」と、そのような思いからスタートすることでも大歓迎ですね。

ですから、誰しも部外者なのではありません。自分の好きなことをやっていて、その活動の延長線上に、環境問題の解決というロジックを少しつなげていただければ、皆さんの取組が、「あれ、私の取組ってSDGsだったの？」となります。そのようなことは、大歓迎です。

今日はダークスカイ協会さんの紹介もありましたが、私は、ある意味、皆さん全員がダークホースだと思うのです。誰がどうブレイクするのか分からない。ですから、先ほどお話を聞きながら、ダークホース協会を作りたいなと思ったのです。

要は、誰もが地域の面白いアイデアを作って活動する担い手になり得るのだということが、私からのメッセージです。楽しいことをやりながら、みんなとワイワイやっていって、そこに地域循環共生圏づくりが少しでも紐付いてくると、「ああ、そういうことだったのね」「みんな楽しくやろうね」という話になるかなと思います。

ぜひ多くの方と一緒に「活動しよう」というよりも、「遊んでいきたい」と思います。今日はどうもありがとうございました。

高橋：

ありがとうございます。最後に、「活動しよう」というよりも、「遊んでいきましょう」というコメントがありましたが、まずはご自分がやっていることの延長上で、楽しんで、気軽にチャレンジしてみる、声を挙げてみるのが大切なのかなと思いました。ありがとうございます。

では最後に、佐々木室長、皆さんへのメッセージを頂いてもよろしいでしょうか。

佐々木：

地域循環共生圏といいますと、とても難しいもののように皆さん聞こえてしまうかもしれません。漢字が七つも並んでいるので、「なかなか」という感じに聞こえるのだと思うのです。

私たちが目指している地域循環共生圏は、様々な環境にも貢献するような取組、事業やビジネスが地域で沢山起こってくる、それが社会の仕組みを変えていくということが、地域循環共生圏の一番大事な柱になっていると思っています。

このような取組というのは、例えば真庭市のバイオマスの発電所などはかなり大きいもの

で、なかなかみんな、すぐにはあそこまで到達できそうにもないなと思ってしまいますが、別にそのよう取組だけでなくでもいいのです。小さな取組でも、実は地域で SDGs を実践していく重要な取組というのは沢山あるわけです。

また真庭市のバイオマスの発電所も、もしかしたら、小さな、小さなところから、芽生えた発想や思い、地域の人々の熱い思いが徐々に成長して形になっていったのではないかと、場合によっては飲み会でそのような話が出たのかもしれませんが。というようなところから始まっているのではないかと推測します。

ですから、小さな一歩から、皆さん、ぜひ始めていただければと思います。そのヒントになることが、谷中先生のご発表の中にありました、グッドライフアワードに実は沢山あると思っています。

あそこの中では、きらりと光る、いい取組を表彰しているのですが、大きな取組もあれば小さな取組もあります。あそこの中に、「ああ、なるほど、地域で楽しく活動して、でも SDGs にも貢献する取組ってというのはこんなものがあるのか」というヒント集だと思っていただいて、一度調べてみていただけたら嬉しいと思います。

高橋：

ありがとうございました。皆さん一人一人の、一見もしかしたら小さく見えるかもしれない活動が沢山集まって、それが大きく世の中を変えていくことにつながります。ですから、ぜひ最初の一步を踏み出してくださいというコメントだったかなと思っています。佐々木さん、どうもありがとうございました。

それではこちらで本日のパネルディスカッションを締めくくらせていただきたいと思います。真庭市の吉永副市長、美星町の三宅副会長、谷中さん、佐々木室長、本日はどうもありがとうございました。以上で、パネルディスカッションを終了させていただきます。

司会：

進行していただきました高橋様、ありがとうございました。飲み会の幹事というお話がたびたび出てきましたが、本日は、さながら飲まないオンライン飲み会に視聴者の皆様に参加していただいたという形になるかと思えます。そしてお話の中で気づきがあったり、やる気が湧いたりしていただけたら幸いです。ご登壇いただきました皆様方、本当にありがとうございました。

それでは最後に、本シンポジウムの閉会に当たり、東京都の会場から環境省大臣官房環境計画課企画調査室室長佐々木真二郎より、閉会の挨拶をさせていただきます。佐々木室長、お願いいたします。

## 7. 閉会挨拶

佐々木：

皆さん、長時間にわたりまして、本日はどうもありがとうございました。またご登壇いた

いた皆様にも貴重なお時間を頂きまして、本当にありがとうございます。

環境省では地域循環共生圏を進めておりますが、今日のシンポジウムの中では、とにかくまず「楽しみながらやる」、それから人が資源であって人こそが地域の宝であって、その人と人との出会いこそが新しいものを生み出して行って地域を活性化していく、そのようなメッセージを発信できたかなと思っております。

環境省の方でも地域循環共生圏の取組を進めてまいりますが、一緒に取組もうという地域の方々、企業の方々、募集しております。よろしければご参加いただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

司会：

これもちまして、政府広報オンライン、「未来に向けて知る・変わる・守る チームNEXT ステップ」のオンラインシンポジウム、「環境で地方を元気にする！地域循環共生圏」を終了とさせていただきます。本日はご視聴いただきまして、誠にありがとうございました。

以上